

| | |
|------------------------|----|
| 親鸞像の再構築に向けて | 1 |
| 2005年度「指定研究」(追加)研究組織一覧 | 2 |
| 2004年度「指定研究」研究経過報告 | 3 |
| 2004年度「一般研究」研究結果概要 | 11 |
| 公開講演会要旨 | 17 |
| 学会参加報告 | 20 |
| 海外調査出張報告 | 27 |
| 彙報 | 32 |

研究所報

No.47

2005. 10. 1.

親鸞像の再構築に向けて

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究 チーフ 教授 安 富 信 哉

2011年、私たちは、親鸞聖人の750回御遠忌を迎える。この大切な節目を控えて、真宗総合研究所では、この度、「親鸞像の再構築」という研究課題のもと、御遠忌記念特別指定研究班が発足した。

御遠忌は、宗祖親鸞が入滅して、遠く歳月を経過した後に営まれる記念の法要として、50年、100年という単位で、大規模に催されてきたが、折々に親鸞像が確認されてきたと言えるであろう。

近代に入って最初の御遠忌は、1911年(明治44)4月に真宗大谷派で催されたが、この650回御遠忌の前年には、佐々木月樵著『親鸞聖人伝』が刊行され、一方、長沼賢海著『親鸞聖人の研究』が発刊された。後の本学第三代学長・佐々木の宗教性あふれる聖人伝と歴史学者・長沼の批判的な考証による親鸞研究は、新しい時代状況のなかで親鸞像を確認した画期的な労作であり、以後の親鸞像の形成に大きく寄与した。

そしてそれから50年後、1961年(昭和36)4月、700回御遠忌が浄土真宗各派で催された。前年には、大谷大学編『親鸞聖人』が刊行され、御遠忌の翌年には、赤松俊秀著『親鸞』が刊行されている。戦後の研究を踏まえて論述されたそれぞれの執筆者のアプローチは、親鸞像の形成に清新な風を吹き込んだ。

歴史学者の赤松氏は、『親鸞』(吉川弘文館 人物叢書)を執筆するにあたり、

この書は、同じ叢書内の他の書に比べてすこし論丈めいていて、ことによると読者にご迷惑でないかと思うのであるが、この五十年の間、歴史学の進歩が常に新しい親鸞の人間像を作りだしたことを思い、それになるべく副いたたいと念願して、あえてこの形式をとった。

と「はじめに」で述べている。すなわち「新しい親

鸞の人間像を作り出し」てきた過去50年の「歴史学の進歩」に基づいて、本書を執筆したとしている。周知のように、ここに描かれた親鸞像は、以後の親鸞理解に大きな影響を及ぼした。

このときからさらに50年の歳月を経て、いま私たちは、750回御遠忌を迎えようとしている。この半世紀の間に、「歴史学の進歩」には、目をみはるものがあつた。歴史学の門外漢でも、顕密体制論や律令体制論などの歴史家の論議を無視して、親鸞の歴史的位置づけについて語ることはできなくなった。

これと同時に、見落とせないのは、親鸞の研究が、広範な領域に広がってきたことである。書誌学の領域では、『教行信証』坂東本をはじめとする親鸞の諸著作の精緻な研究が進み、「信巻」別撰説なども提起された。思想の領域では、仏教学者や哲学者などによる様々な親鸞思想の検討があり、あるいは国際化の状況のなかで、鈴木大拙訳『教行信証』の出版をはじめ、異言語・異文化からの親鸞へのアプローチがあつた。また、社会の領域では、いわゆるポスト・モダン的な状況のなかで生命倫理や人権論の側からの親鸞思想との活発な対話の試みがあつた。

そのようななか、関連諸資料の蓄積と学的伝統において、親鸞研究のメッカともいべき本学が、研究の一層の前進のために、課せられている使命は大きい。この50年の諸研究に基づく親鸞教学の現代的な意義の再確認、そして学界への成果の公表が、多方面から期待される。

その意味で、来るべき御遠忌を前に、本研究班が、各領域の学問的成果を整理し、さらにそれらを踏まえた上で、未来の研究への展望を開く基礎を提示し、「親鸞像の再構築」に向けて作業を始動することは、実に意義深いことと思われる。

2005(平成17)年度「指定研究」(追加)研究組織一覧

■ 『特別指定研究』(2005年7月26日付発足) 代表者 木村 宣彰(学長)

| 研究名 | 研究課題及び研究組織 | |
|---------------------------------|------------|---|
| 大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究 | 研究課題 | 親鸞像の再構築 |
| | 研究員 | 安 富 信 哉 (チーフ・教授・真宗学) 門 脇 健 (教授・宗教学) 草 野 顕 之 (教授・日本史学) 木 越 康 (助教授・真宗学) 山 野 俊 郎 (助教授・仏教学) |
| | 嘱託研究員 | 平 雅 行 (大阪大学教授) 小 山 正 文 (同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職) 山 田 恵 文 (本学短期大学部助手) |
| | 研究補助員 | 三 木 朋 哉 (博士後期課程第2学年) |

※研究員・嘱託研究員は2005年10月1日付、研究補助員は2005年8月1日付発令。

この特別指定研究は、大谷大学が2011年の親鸞聖人750回御遠忌を記念しておこなう諸事業の一環である。研究課題の詳細については本号巻頭を参照。

■ 「指定研究」研究員の追加

| 研究名 | 研究員名 | |
|--------|------|----------------------|
| 大学史研究 | 研究員 | 加 来 雄 之 (助教授・真宗学) |
| 国際仏教研究 | 研究員 | 阿 部 利 洋 (専任講師・文化人類学) |

※2005年10月1日付発令。

2004(平成16)年度「指定研究」研究経過報告

大学史研究

大学史関係資料の 収集・整理・公開

チーフ・教授 安富 信哉
(真宗学)

本研究は、『大谷大学百年史』『清沢満之全集』の刊行という本学にとっては画期的な出版を経て、そこから新たに明らかとなった課題に立って、本学の学事三百数十年の歩みを明らかにしようとするものである。大学が自己の歴史を点検し、関係資料を収集・整理・公開することは、大学内部の課題に答えるのみでなく、社会的な存在としての大学の責務であるという面も持っている。本研究は当面3カ年を研究期間とするものであるが、内容的には中長期的な視点を必要とするものである。

本年から始まる3カ年は、Ⅰ、近代以前の大学史(真宗学事史)関係資料の収集と整理、Ⅱ、近代以降の大学史(真宗学事史)関係資料の整理と公開、の二面を軸にして、昨年度までの指定研究と切り結びながら発展的に本研究の視野を開いて課題を具体的にすることが当面の課題である。Ⅰにおいてまず必要なことは、昨年度までの指定研究(真宗学事研究・大学史編纂研究)において収集した資料を整理することと、研究の方法論を確立する事である。Ⅱにおいてまず必要な事は、『清沢満之全集』の事後処理(テキストデータベースの完成と未公開清沢満之自筆資料の翻刻・整理など)と、研究方針の検討である。以下に2004年度の研究経過を概観しておきたい。

Ⅰの点に関する研究経過

近代以前の学事を研究するための方法論の検討を重ねた。過去三百数十年の学事に関する研究成果について改めて確認し、その観点から、近世における宗学の中心であった「学寮」についてその重要性に着目した。まず、主な内容として慶長以降の大谷派における講義・典籍・関連事項の記録等について、年表形式でのデータ化に着手した。さらに、真宗教団における教学を歴史的な視点から把握するに当たっては、大谷派のみならず、本願寺派の「学林」についてもその流れを確かめる必要性を

認めることから、大谷派学寮年表と同様に、本願寺派学林年表のデータ化にも取り組んだ。本年度中に、大谷派学寮年表は明治中期、本願寺派学林年表は嘉永年間までのデータ化が終了したが、①以後、事象をデータ入力する場合の時代的見極め、②東西年表のデータを統合させる場合の形式設定、③これらのデータを公開する際しての手順、およびデータ自体のチェック、といったことが今後継続して取り組むべき課題である。

Ⅱの点に関する研究経過

真宗学事研究・大学史編纂研究において収集された資料の整理と保存に関する業務をすすめた。主な内容は次のとおりである。

①複写によって収集された史料のデータベース化。

『大谷大学百年史』刊行の基礎史料として収集・使用されたものである。『百年史』刊行時、これらの史料はテーマ別にファイル管理されていたが、今後これらの史料の公開に向け、重複史料の統廃合をはじめ収集史料をさらに細分化しデータベース化した。この作業によって史料検索の精度は従来に比してはるかに向上した。

②学寮・真宗大学・真宗大谷大学・新制大谷大学時代の史料9000点余りの長期保存に向けた保管作業。

大学行政史料をはじめとする貴重な大学史所蔵資料の長期保存に向けた対応である。中性紙封筒にて史料を管理し、史料の劣化を防ぐだけでなく、移管作業において史料と既成データとの照合・再調査を行い、史料情報を充実させている。

③写真史料の保管作業。

写真史料に貴重なものが多いが、適正な保存処理がなされていないこと、また写真の閲覧請求に迅速に応じられる状況にないことなどから、所蔵写真のデータベース化、サムネイル化を進めることになった。写真史料のデジタル化は、ホームページにて史料を公開する際にも有用である。今年度も継続して整備を進めていくことを課題としている。

『清沢満之全集』刊行後の事後処理の経過については以下のとおりである。

- ①『清沢満之全集』発刊に際し、収集した資料の整理。
『清沢満之全集』未収録の清沢満之自筆資料の翻刻・校正作業を行った。全集には清沢の著述を収録したが、『全集』に収録しなかった東京大学・帝国大学時代の1883(明治16)年～1887

(明治20)年頃に清沢が受講した講義ノートや清沢が書物から抜書きしたノートや索引などがあり、それらを翻刻した。和文・漢文で書かれた文献を中心に43文献(フィルム79本分)の粗究的な翻刻が終了した。

②『清沢満之全集』のテキストデータの校正作業。

『清沢満之全集』のテキストデータの校正作業を行った。この作業は本来全集編纂時になされるべきものであったが、時間不足の関係から未完成となっていた。『全集』全九巻中第六巻までの校正を終了した。

③清沢満之関係資料調査。

清沢満之関係資料の調査のため以下の調査を行った。
2004年6月5、6日愛知県碧南市清沢満之記念館
2004年7月27日大谷大学図書館
2004年10月16、17日愛知県碧南市清沢満之記念館
大谷大学図書館においては「大谷大学蔵稲葉昌丸関係書簡」6文献を調査した。『全集』に収録した著述で自筆原稿が未確認であったもの数件を確認した。清沢満之記念館においては、「The Skeleton of a Philosophy of Religion」への書き込みと清沢満之の肖像を含む未公開の写真資料の所在を確認した。

④清沢満之資料フィルム・デジタル画像のデータベース整備。

清沢満之自筆資料のデジタルデータ、写真資料の目録を清沢満之記念館へ提供した。Eastern Buddhist Society (The Eastean Buddhist 第35巻)、京都新聞(10月18日、10月25日、11月1日朝刊)への清沢満之肖像写真の掲載の依頼に応じて、写真データを作成し、貸し出した。また、DB研究の「DB研究班スキャニング画像と大学史研究所蔵の写真データの対照表作成」作業の協力依頼に応じて、清沢満之自筆資料のデジタルデータを貸し出した。また、DB研究に対しては、「清沢満之史料公開にむけて テキストデータ(全集入稿用)借用と作業監修」の依頼に応じて、『清沢満之全集』第八巻所収「臘扇記」のテキストデータの貸し出しを行った。

⑤清沢満之に関する質問・資料提供への対応。

清沢満之関係の資料に関して、在家仏教協会に対応した。また、清沢満之記念館設立準備委員会の依頼に応じて、人物略歴の作成協力等を行った。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の収集・整理

チーフ・教授 R. F. ローズ
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握すると共に、真宗を中心とした浄土教思想を国際社会に紹介することを目的としている。この目的を達成するため、本研究班では、海外仏教関係出版物の収集と整理、国際学会の開催や研究員の派遣、真宗・仏教関係文献の英語やドイツ語への翻訳作業などを進めてきた。

近年はこれらの研究に関して、文献収集や国際学会への研究員派遣などの通常研究業務を除いての活動は、主に英語圏・ドイツ語圏・韓国語圏という3つの分野に分かれて進められてきた。それぞれ本年度の研究活動状況を報告をするならば、下記の通りである。

〈英語圏〉に関するもの

真宗・仏教関連資料の英語への翻訳研究に関して、これまで近代真宗教学の代表的論文の翻訳に取り組んできたが、現在までに清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深の代表的論文8本の翻訳を完了している。これらの論文を、“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”としてニューヨーク州立大学(The State University of New York)から出版予定であるが、本年度は掲載用の資料として、4氏についてのBibliographyを作成した。データについては、関係大学図書館や関係学会のデータベースから抽出した。4氏の著作はもちろん、4氏に関する研究書や研究論文についてもすべてを網羅するかたちでデータを収集し、ファイルメーカーを用いてこれを整理した。著作、論文の題名、著者名、出版社、出版年などの通常の項目に加え、ローマ字による読み方を併記したことにより、日本語を母国語としない研究者でも、資料に当たることが可能となるものである。現在は、この完成したBibliographyをもとに必要な情報を選択し、“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”で紹介すべきものについて選取中である。

国際学会への参加に関して、本年度の主要な活動を紹介すれば、3月24日~30日に東京において開催された国

際宗教学宗教史会議第19回世界大会 (IAHR 2005 TOKYO) への参加が挙げられる。「国際宗教学宗教史会議 (The International Association for the History of Religions)」は1950年に設立され、40ヶ国余の研究団体(学会)が所属する世界最大の宗教研究者の国際学術団体である。宗教学ならびに宗教を対象とする研究発展のための国際的ネットワークを構築することを目的とし、5年に1度世界大会が行われている。この度、19回大会を主催した日本宗教学会は、1930年の設立であるが、当初から国際宗教学宗教史会議と深い関係をもってきた。1958年には、欧米以外では初めての世界大会として東京で大会が開かれ、日本の宗教学研究に多大な刺激を与えることとなった。今回の開催は日本で最初に宗教学講座が開設されてから100周年、日本宗教学会設立75周年の記念すべき年であった。

大会テーマは「宗教—相克と平和」であったが、大谷大学として参加するにあたり、どのようなテーマを設定すべきであるか、研究所で何度か研究会が重ねられた。そして「『悪の自覚』と現代社会—親鸞思想を中心として—」と題して、パネル企画の形で参加することが決定された。パネリストはスサ・ドミンゴス(南山大学講師)、鍋島直樹(龍谷大学教授)、一楽真(本学助教授)の各氏が、司会は木越康(本研究班研究員)、井上尚実(同左)の両名が務め、門脇健本学教授とマイケル・バイ本学客員教授がコメンテーターとして参加した。

2時間という限られた時間で、十分議論を尽くすことができなかつたが、話題はおよそ次の2点に絞られた。第一点は、親鸞思想における「悪の自覚」がどのような人間を生み出すのかということ、そしてもう一点は、そのこと(その者)が社会に対してどのような具体的繋がりを持つのかというものである。前者が親鸞における信仰そのものに対する問いであるとするならば、後者は、そのような親鸞思想もしくは信仰者の、社会関与の問題であると言えよう。特に後者は、当大会の「宗教—相克と平和」という総合テーマに直接関係する話題でもあり、会場からも多くの質問が寄せられた。

これらについて最終的な結論を得ることはなかつたが、現代社会に真宗はどのように対面するのか、多くの課題を投げかけられる大会であった。

〈ドイツ語圏〉に関するもの

1999年の第3回ドルフ・オットー・シンポジオンにおいて「仏教とキリスト教との対話」という宗教間対話が、宗教学者マイケル・バイ博士の仲介を得て、マルブルク・フィリップス大学福音主義神学部と大谷大学の間で開始された。以降、共同研究は継続的に実施され、

2003年度までの5年間の研究の成果が、『仏教とキリスト教との対話』全3巻というかたちで法蔵館から出版された。このうちの第1巻と第3巻については、同時にドイツでも公刊され、わずかながら真宗・仏教の思想を、ヨーロッパへと発信する役割を果たしたものと思われる。

2004年度は、このような研究の成果を引き継ぎつつ体制を一新し、今後のあらたな展開の可能性を図る試みがなされた。そこで、さらにキリスト教関係の研究者との対話交流を行い、真宗が持つ国際的な意義を確認していくためには、キリスト教関連の基礎資料をも視野に入れ、研究を進めていく必要があるということが確認された。

今回その一つの視点を提示すべく、マルブルク大学のデードリッヒ・コルシュ教授の『マルティン・ルター』の翻訳に着手した。この著作は、思想と生涯とを社会思想史の成果をもって考察しようとするもので、宗教思想と社会の歴史を見るとき大きな参考となるであろうし、これまでの宗教間対話をより深める基礎となるであろうことも予想される。翻訳は2005年度以降も継続して行わなければならないが、翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

また、このような課題に関連して、マルブルク大学実践神学教授ゲルハルト・マルセル・マルティン氏の「不安と宗教 Angst und Religion」をはじめとするいくつかの論文の翻訳作業をも進めている。教授は、神秘主義・終末論などに特に関心を持ち、ルドルフ・オットー・シンポジオンをはじめとする両大学の共同研究においても、主要的役割を果たしてきた研究者である。

さらに、2005年5月には第5回ドルフ・オットー・シンポジオンが開催され、再び本研究班の研究員(門脇健・木越康)も発表者として参加する予定である。同シンポジウムのテーマは「宗教における内的平和と暴力の克服」である。国際宗教学宗教史会議第19回世界大会での経験をも踏まえ、真宗・仏教の立場からどのような話題を提供することができるのか、研究会を重ねたことである。

〈韓国語圏〉に関するもの

この分野に関する研究は、主に韓国ソウルの東国大と共同研究という形で進められてきた。同大学とは、1997年以来、提携関係をもって学術研究にあたってきた。1998年からの3年間は、「韓日仏教信仰比較研究—浄土思想を中心として—」というテーマの下に共同研究を重ね、その成果を韓・日双方で公刊し、第1次の共同研究を終えた。その後、第2次の研究を始めるために調整をはかったが、双方の学内事情によって、若干

停滞していた。そこで2004年度3月に、韓国ソウルで研究準備会を開き、日韓共同研究の重要性を改めて確かめるとともに、今後、共同研究を再開することを確認した。

日・韓国は、現に大乘仏教が生きている国として、古来より深い関係を持ってきた。現在では、韓国においては、現に比丘・比丘尼が僧院の中で研究修行するという事実があり、その伝統の上で複数の大学において仏教が学問的に研究されている。一方、日本では大乘仏教の伝統の上で、近代的な方法論を取り入れた仏教学が学ばれている。特に本学では、清沢満之以降、近代的な方法による内観的な仏教研究が樹立されてきた。このような双方のあり方を見ると、おなじ仏教研究といっても、両者が基盤とするものは、決定的に異なっていると言うことができる。そこで、両者が交流を持ち、研究を進めることによって、互いの見えない点を発見し、より大きな視点からの仏教研究を推進することができるのではないかと確認された。今後は、以上のような相互理解の下に、「仏教における信の問題」を共通テーマし、研究を行っていくことが確認された。

西藏文献研究

チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 小谷 信千代
(仏教学)

本研究課題は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2004年度は、以下の課題に取り組んだ。

(1)チベット現地研究機関・研究者との共同研究体制の構築

チベット文化の研究に際し、現地での調査および、チベット人研究者との共同研究の必要性は、ますます高まってきているといえる。こうした状況に対応するべく2004年夏、チーフ・小谷信千代をはじめとして、研究員・ツルティム・ケサン(白館戒雲)、三宅伸一郎およ

び研究補助員・井内真帆をラサに派遣した。井内、三宅の両名は、8月にラサ入りし、西藏大学関係所管と同大学文學院講師ケツン氏招聘のための折衝および必要書類の作成をおこなった。また、パツァブ(Pa tshab)、ゲェー・ラカン(rGyal lha khang)、ランタン(Glang thang)といったベンボ地方のカダム派系古刹を訪問、現状調査をおこなった。とりわけ収穫だったのが、ゲェー・ラカンに安置されている同寺の創建者シャン・ナナム・ドジェ・ワンチュク(Zhang sna nam rDo rje dbang phyug, 976-1060) 将来の弥勒石仏の写真撮影であった。20世紀の初頭ここを訪れたゲンドゥン・チョンペー(dGe 'dun chos 'phel, 1903-1951)はその銘文から、チベットで作成されたものではない、と推測しているが、果たしてそのプロポーションや頭部の飾りの様式は、チベットの作品には見られない特異なものであり、彼の推測は十分に説得力のあるものである。

9月には小谷、ツルティム両氏がラサ入りに先立ち、まず北京・中国蔵学中心を訪問。宗教研究部門のトップであり本研究所にも滞在した経験をもつダムドゥル氏および本学で博士号を取得され、帰国後ダムドゥル氏と同じ部門に勤務している慧光両氏と会見した。ラサ入りの後、西藏大学文學院および西藏社会科学院、西藏図書館、西藏博物館を訪問。将来の共同研究体制構築に関する具体的な意見交換を行った。同時に現地調査の一環として、ラトー(Ra stod)、ジャン(Jang)、サンブ(gSang phu)、ラデン(Rwa sgreng)といったカダム派系寺院の現状調査も行った。これらはいずれもゲルク派の宗祖ツォンカパ(Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419)ゆかりの寺院であり、今でも彼にまつわる多くの伝承や遺跡が残っており、それらを実際に聞き、目にすることができたのは、大きな収穫であった。

研究者同士の交流の一環として、西藏大学文學院講師ケツン氏を10月16日から11月23日の1ヶ月強招聘した。滞在中、10月20日、27日、11月2日、10日、12日、16日、18日の7回にわたって、講義をしていただいた。テーマは、チベットにおいて、アヴァダーナ文学として、また詩(Kāvya, snyan ngag)の手本として権威のあるクシェーメンドラ(Kṣemendra, dGe ba'i dbang po)作/ラクシュミーカラ(Lakṣmikara)、シヨントン(Shon ston rDo rje rgyal mtshan)訳『アヴァダーナ如意樹(rTogs brjod dpag bsam 'khri shing, Avadānakalpalatā)』第24章「ヴィシュバンタラの物語」の解説であった。本学大学院生が中心となり、事前に予習会をし講義に臨んだ。

講義はすべてチベット語で行われ、研究員・三宅の通訳のもと、内容の理解に努めた。美文体の本テキストに

は数多くの難解な点があるが、氏の講義により、より深く理解することができた。またその講義スタイルに触れることで、チベットの伝統的な学習方法の一端に触れることができた。その成果として、当該章のチベット語テキストおよび和訳を Web 上で公開した（和訳：http://web.otani.ac.jp/cri/twrrp/studo/avadana/avadanakalpalata24_jtradukajo.html）。

11月17日には「チベット文学史における『古代・近代・現代』という時代区分について」という講題で、公開講演会をおこなっていただいた。講演の中で、これまでに中国で刊行されたチベット文学通史の成果を紹介しつつ、時代区分についてはかならずしも一定ではないこと、こうした現状を打開すべく「教材審査委員会 (Slob gzhi rtsom sgrig blta zhib lhan khang)」による新たな時代区分導入の動きがあることが報告された。「チベット文学史」は日本においてなじみの薄いジャンルであり、それゆえに関心と呼んだのか、学外からの参加者も多く、盛況であった。

(2)北京版チベット大蔵経コロフォン・データの構築

チベット大蔵経所収テキストのコロフォン（奥書、'gyur byang）は、訳経史やテキストの伝来を知る上で、極めて重要な史料であり、それに対する総合的な研究は、1930～32年に『西藏大蔵経殊殊爾勘同目録』が刊行されて以来、Bischoffやde Jongによりおこなわれてきた（F.A.Bischoff, *Der Kanjur und seine Kolophone*. 2 Bd., Indiana: The Selbstverlag Press, 1968. J. W. de Jong, "Notes à propos des colophons du Kanjur", *Zentralasiatische Studien*. 6, 1972, pp.505-559.）。本研究課題ではこの間『西藏大蔵経勘同目録』電子化をおこなってきたが、その過程で、同目録の記述を検討すべく、各テキストのコロフォンの内容を確認してきた。一連の作業の中で、その史料価値を再認識させられ、テキスト・データベース構築の必要性を感じた。研究員・研究補助員はもとよりアルバイト諸氏の努力により数度の校正を経て北京版チベット大蔵経カンギユル部所収全テキスト（1055テキスト）のコロフォン・テキスト・データの構築が終了した。データは現在 Web ページ上で公開されている（http://web.otani.ac.jp/cri/twrrp/studo/kolofono_kanjur/enhavo_kolofano_kanjur.html）。近年盛んにおこなわれているチベット大蔵経、とりわけカンギユルの成立過程や諸版・諸写本の関係に関する研究に大きく寄与するものと信じている。

(3) TLKのバージョン・アップ

MacOSX 用試作品に見られるワードラップや結合の

問題などを2004年度内に解決することができなかった。今後の課題とした。

(4) パーリ語文献研究の終了に伴う、収集資料の整理と研究

パーリ語文献研究が収集した『パンニャーサ・ジャータカ』に関わる資料を利用しやすい形に整理し、一部電子化をおこなった。

(5) その他

本学図書館所蔵稀観チベット語文献の一つ、ゲイエ・ツルティム・センゲ (dGe ye Tshul khriims seng ge) 『インド・チベット仏教史 (rGya bod kyi chos 'byung rin po che)』（蔵外 no.11847）のテキスト電子化をおこない、暫定的校訂テキスト作成、これを Web 上で公開した（http://web.otani.ac.jp/cri/twrrp/tibdate/rgya_bod_chos_vbyung_T.html）。

漢文文献研究

浄土教関係文献の調査と研究

チーフ・教授 藤嶽 明信
(真宗学)

本研究は、本学所蔵の稀観仏教漢文文献の中、浄土教関係の古写本・版本等の調査・研究を目的とするものである。その中でも2004年度は、親鸞の『教行信証』を対象を絞って、目録の整理及びその書誌情報の確認・調査を行ったので、以下の通り報告する。

I 本学図書館作成目録の総合化

本学図書館の蔵書目録としては、基本とすべき『大谷大学図書館和漢書分類目録』、『第二大谷大学和漢書分類目録』、『大谷大学図書館第三和漢書分類目録』の三目録がある。これに加えて『林山文庫目録』、『香月院文庫目録』、『円光寺文庫目録』、『楠丘文庫目録』、『瑞蓮寺文庫目録』、『妙正寺目録・浅野長量師寄贈典籍目録・神田家記録目録』といった各文庫等の目録がある。このため、一つの文献の書誌情報を一覧する為には複数の目録を閲覧しなくてはならない不便さがあつた。そこでまず、これら複数の目録における、『教行信証』の書誌情報を総

的に一覧できる、請求記号順の資料の作成を進めた。目録から抽出した対象は、宗甲・宗丙・宗大・宗小の請求記号のものに限定したが、この一覧表作成によって、文献の一枚が、どの目録の何処に記載されているかを把握することが可能となった。

この作業によって、目録の書誌情報についての誤記も数点見出された。その数例を以下に示す。

1. 『第三目録』における題名表記の誤り。『顕浄土真実教行信証文類』がことごとく『顕浄土真実教行信証文類』と記されている。
2. 『坂東本』の表記の不統一。「宗丙78」『第一目録』備考欄および「別30」『第一目録』書名欄では「坂東本」と記されている。
3. 『楠丘文庫目録』の「宗大12134」の刊行年の誤り。刊行年が天保三（1646）年とあるが、正しくは正保三（1646）年である。

これらの目録における書誌情報の誤記や不統一については、今後修正が必要であろうと思われる。

II 本学図書館作成以外の目録情報の整理

上記の資料に基づき、これまで『教行信証』に関して本学図書館以外で作成された書誌目録との照合・確認を行った。対象とした目録は、佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』、藤島達朗『教行信証の書誌』、重見一行『教行信証の研究』、『真宗史料集成』、『古写古本真宗聖教現存目録』である。

これらに記載された書誌情報を、各目録ごとに一覧表にまとめ、それを本学目録の書誌情報（刊行年・形態・冊数・備考等）と照合して、本学所蔵の『教行信証』古写本・版本が前述の諸目録記載本のいずれのものに該当するかを確認した。また、その過程の中で確定できないもの（①資料によって推測できるが確定には至らないもの、②書誌情報がない、もしくは曖昧であるため、全く推測できないもの）に関しては、後述の実物調査によって検討した。

III 本学所蔵の 教行信証 の書誌情報整理

上記I、IIの作業を踏まえた上で、計15件の確認・調査を行った。その際、貴重書に関してはマイクロフィルムからの紙焼（対象：5件）を、その他に関しては実物（対象：10件）を用いた。

調査により判明した中から、数例を以下に示す。

目録等によって本学所蔵文献の何れに該当するか推測はできるが確定には至らないものには、請求記号「長保42」『教行信証御自釈』がある。『第一目録』備考欄には「香月院深励編（自筆本）」と示されているが、『教行

信証の書誌』解説には「法恵修訂本」とされている。調査によって、①この本に付された題名は『御私釈』であること、②深励は序文を記したのみであり、編者ではないこと、③冊数は1冊ではなく、「本末2冊」であることが判明した。

また、書誌情報がないかもしくは曖昧であるために、本学所蔵の何れの文献に該当するか全く推測できないものには、請求記号「宗丙190」がある。これは『第三目録』備考欄には、「袋綴 祖釈抜粹」とあるのみである。現在、図書館所蔵のマイクロフィルムの表紙には「慧空編」と記されているが、『教行信証の書誌』解説等を併せ検討してみると、この一本は磐船願入寺相伝の伝存覚真蹟本の書写本に相当するものであると考えられ、「慧空編」の表記については検討を要することが確かめられた。

これらの調査をふまえ、刊記・奥書・装丁等の情報を追加し、最終的に本学所蔵『教行信証』の請求記号別カードを二種類作成した。

1. 『第一』・『第二』・『第三目録』および各文庫目録の書誌情報と、IIで挙げた各目録の文献解説、さらに今回の調査結果と誤記の訂正を統合したカード。
2. IIの各目録の解説以外の書誌情報を入力したカード。

これにより、本学所蔵の『教行信証』・関連典籍の書誌情報を補完・充実させ、一覧することが可能となった。

IV 作業を通して

以上の作業を通して、本学所蔵の『教行信証』関連典籍の目録整理（データベース化）の第一歩を踏み出すことができたが、今後の具体的な課題としては以下の作業を挙げることができよう。

1. 各文献の奥書・刊記の撮影および翻刻
2. 本学での特別展観などに際して作成された目録との照合
3. 先行する研究論文などで言及されている本学所蔵文献の確定とその一覧表の作成

今年度の取り組みをふまえて、今後、他の浄土教関連文献、さらには本学が所蔵する膨大な数に上る仏教漢文文献についての総合的な目録作成（データベース化）に着手することが大きな課題となろう。

大谷大学 DB 研究

大谷大学所蔵貴重資料の
デジタル映像化チーフ・教授 草野 顕之
(日本史学)

本研究は、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なうものである。本年度は、昨年度に引き続いてデータベース構築の根幹を為すデジタル画像の制作に向けて、研究及び実作業を行なうと共に、文化財のデジタル化及びその提示方法に関する諸問題を検討し、デジタル画像の作成からデータベースの公開に至るまでの全体行程を視野に入れつつ、問題点の指摘とその解決を目指した。

【デジタル画像の公開に向けて】

本年度は、デジタル化した画像データの公開に向けて、様々な検討を重ねた。本研究班では、清沢班が西方寺にて撮影してきた35ミリポジフィルムの移管をうけ、高精度スキャニング及びデジタル化作業を行なってきたおり、その作業は昨年度末の時点で完了したが、このデジタル化したデータをいかに公開していくかが今年度の研究課題のひとつであった。

課題の遂行のために、2回の研究会と、6回に及ぶ作業部会を開催した。

◇DB班第15回研究会

7月16日(金)17:50~20:00

(於：響流館3階マルチメディア演習室)

・研究報告

「デジタル画像の公開に向けて」

三好 圭、前田 千尋

◇DB班第16回研究会

12月21日(火)16:10~18:00

(於：響流館4階プレゼンテーション・ルーム)

・研究報告

「デジタル画像の公開に向けて(2)

——現場からの作業報告——」

三好 圭、前田 千尋

【作業部会の開催】

◇第1回作業部会

6月18日(金)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・西方寺、清沢満之資料のXML化について

◇第2回作業部会

8月23日(月)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・西方寺、清沢満之資料のWebコンテンツ作成について

◇第3回作業部会

9月27日(月)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・学内ネットワーク公開(仮)にむけての検討会

◇第4回作業部会

10月8日(金)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・西方寺、清沢満之 Webコンテンツ作成成果発表会
アルバイト学生 水田、柑本、中尾

◇第5回作業部会

11月19日(金)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・学内ネットワーク公開(仮)XML、データベース化、中間報告会
本大学卒業生 三好 圭

◇第6回作業部会

12月5日(金)16:00~(於：講堂棟DB作業室)

・大学史研究班(旧満之研)保管データとDB保管データのデータ整合性についての検討会

こうした作業を通じて、大谷大学における文化財のデジタル化及びその提示方法に関する諸問題のうち、特に「提示方法」について、様々な問題点を浮き彫りにすることができた。

1. 学内ネットワークによる公開における諸問題

我々は、デジタルデータ公開の第一段階として、学内ネットワークによる限定的公開を想定し、その実現に向けて、諸問題を検討した。基本線としては、学内LANを利用し、教員を対象とし、学内サーバを利用して、テキストと画像を関連付けて検索ができる形式を構築することとした。

研究の結果、データベース実現のためのXMLの設計、検索精度、検索スピード、不正コピー対策といった諸問題が確認された。このうち、最も根幹をなすXML設計については未だ解決できておらず、今後の課題となっている。ネットワーク公開には、プログラムの学内サーバへの移植、ユーザー管理プログラムの構築など、実用レベルにするにはもう少し時間を要すると思われる。

しかしながら、今年度をもってDB班は解散となるため、学内ネットワーク公開という方法だけではなく、博

物館などでスタンドアロンにてデータを閲覧する方途なども検討すべきであろう。

2. 図書館蔵貴重書撮影作業

本研究班の主目的のひとつである図書館所蔵（現在は博物館に移管）北京版チベット大蔵経の撮影作業については、様々な試行錯誤を重ねたものの、新撮影室（響流館4階）の環境が、高精細デジタル化のための基準をクリアできず、結局、撮影を再開できずに今年度を終えた。この件については、今後の課題とし、別の機会に研究していきたい。

【研究を終了するに当たっての課題と展望】

DB班の研究を終了するにあたって、蓄積されている膨大なデジタルデータが、着脱式ハードディスクという、極めて不安定なメディアに蓄積されたままであるという問題が残されている。より安定性の高いデータ・ストレージに移管することが急務である。また、デジタルデータを学内ネットワークあるいは学内のスタンドアロン環境を利用して公開するために、「試作品」を提示し、学内の評価をうけることも、さしせまった課題と認識している。

2004(平成16)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

石刻史料から見た近世中国仏教の 社会史の変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

本研究は昨年度からの継続研究で、中国の近世、とりわけ金・元時代の華北における仏教と社会との関わりとその歴史の変遷を究明するための基礎研究として、石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行うことを目的として進めてきた。

当該時代の仏教史研究においては、従来、主として仏教典籍をはじめとする「編纂史料」が利用されていた。もちろんそれに対置される「生の史料」たる石刻史料に関しても、20世紀前半には諸研究者による現地調査及び拓本の将来があり、それらに対する検討もなされてきたが、その成果が従来の仏教史研究に十分に反映されるには至っていない。一方、近年の中国では、急速な経済発展とともに研究環境が改善され、石刻史料が影印あるいは録文という形で相次いで出版されて入手が容易になり、また現地へ赴き関係の碑刻を直接検証できる機会を得ることも可能となった。このような現状から、当該研究の基礎として、従来の研究の蓄積を整理・再検討するとともに、現在確認できる関係石刻史料の把握とその詳細な分析が不可欠であると考えたからである。

活動の具体的な内容としては、まず昨年度に引き続き、既存及び最近刊行された石刻史料集を網羅的に検索し、当該時代における華北地域の仏教関係石刻史料の所在を確認する作業を進めた。また同時に、研究班員を中心として定期的に会読を行い、上記作業で得られた碑刻について、その内容を検討して重要と思われる記事を抽出した。昨年度は主として山西地域を扱ったが、今年度は上記作業で山東地域の史料を多く入手したことから、それらをテキストとして用いた。

一方、夏期休暇中には昨年度実施できなかった山西地域の実地調査を松浦・松川・桂華の研究員三名によって行った。この調査の目的は、本研究が対象としている時代の仏教関係碑刻の存在状況を確認することであり、諸書で紹介される記事をもとに、当該地域の仏教関係文化

財に造詣の深い山西省古建築維修質量監督署署長李会智氏の協力を得て各地を訪ねた。これによって五台山の南山極樂寺では後至元5年(1339)「五台山大萬聖佑國寺弘教大師碑」、同じく碧山寺の東方山麓では至正7年(1347)「大元勅賜灌頂國師阿麻剌室利板的達建寺功德之碑」、晋城縣の青蓮寺では大定4年(1164)「硤石山福嚴院重修佛殿記」、大定7年(1167)「硤石山福嚴院創建鐘樓臺基記」、泰和6年(1206)「硤石山福嚴院記」、後至元2年(1336)「福嚴院重修法藏記」など、昨年度の研究会で検討していた碑刻の原碑を確認することができた。これらについては可能な限り持参した史料と対比して碑刻の形態・文字の異同等の確認作業を行った。また陽曲県楊興鎮において至元19年(1282)立石「長興寺碑」や後至元2年(1336)立石「龍興寺碑」など、当該地の文化財には指定されているものの、いまだ紹介されていない碑刻のあることを知り得たのも収穫の一つである。

これら現地調査および研究会での検討の結果、従来の石刻史料集や地方志の録文については、誤写と思われる文字が少なからずあること、碑陰や題記などが省略されている録文のあることなどが認められた。また拓本や拓影については、それで読みとれない文字が原碑を見ることによって補うことができたものもある反面、原碑の方が判読しにくい部分も少なくはない。これは採拓後の原碑の保存状態によるものと思われるが、このような事柄を通して、石刻史料の「生の史料」としての重要性と、それを扱う上での留意点があらためて確認できた。またそれぞれの碑文の内容からは、寺院の創建や重修・法会の開催・住持の動向をはじめ、寺院と地域の有力者との関係や寺産に関する記事などによって、各地域における様々な仏教界の活動が知られた。そのなかで注目される事象としては、僧の移動などによる寺院間の交流があげられよう。本研究期間内で主として扱った山西・山東地域についていえば、金代では地域社会内での連繋がその中心であったものが、元初になるとその在地性を残しつつ、河北・河南との広域的な繋がりを持つ事例が見られるようになる。また新興モンゴル勢力が華北を支配した早い時期から、為政者が法会を行うなど仏教界の活動に関与していたことを物語る興味深い記事も散見された。これらはいずれも文献史料からだけでは分からない事柄であり、従来の研究では史料が乏しいことから、空白の時代として扱われてきた当該時期華北仏教界の動向を跡付けることができる貴重な史料である。

以上、本研究班では華北地域のうちおもに山西・山東

を扱ってきたが、この活動を進める間にも、河南省に関する石刻史料を載録した『翰墨石影』（広陵書社 2003）をはじめ新たな石刻史料が出版されている。これら最新の情報も含めてさらに検討を進め、華北全域にわたる詳細な状況を把握することが今後の課題となろう。

共同研究

レッシングの戯曲と 宗教的啓蒙精神の研究

研究代表者・教授 友田 孝興
(ドイツ文学)

本研究の今年度の課題は、18世紀ドイツ啓蒙主義文学の代表的存在であるレッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) の代表作『賢者ナータン』を研究の中心に置きながら、彼の啓蒙主義的精神の本質を、宗教・言語・演劇という三つの方向から、総合的に把握しようとするものであった。つまり友田は、レッシングにおける宗教思想の展開を辿りながら、『賢者ナータン』に見られる宗教的・普遍の人間性の理想を、吉田は、ルターに始まりローガウへと続く近世の口承言語の研究を通して、『賢者ナータン』における言語使用の特色を、声津は、悲劇『エミーリア・ガロッティ』のイギリスでの受容を通して、レッシングの戯曲の問題点とその特色を明らかにすることに努め、それぞれの研究課題別考察の成果をもとに、総合的なレッシング像を把握しようと試みた。

〈友田〉レッシングにおける普遍の人間性の理想は、彼の初期の作品『ユダヤ人たち』において既に提起されている。その理想を宗教との関連の中で展開したのが『賢者ナータン』である。彼は、ユダヤ人問題に真理への鋭い目を向け、親友のユダヤ人哲学者メンデルスゾーンの高邁な人間性をこの作品の主人公ナータンに採り入れながら、キリスト教社会のユダヤ人に対する非理性的排他性を批判する。ナータンがテンプル騎士に対して、「私たちは友達にならねばなりません。…キリスト教徒やユダヤ教徒は、人間であるより前にキリスト教徒やユダヤ教徒なのではないでしょうか。ああ、私は人間と呼ばれることに満足しているもう一人をあなたに見いだすことができたなあ」というこの言葉の中に、偏狭な宗派意識を超えた人間解放の一端を垣間見ることができる。この作

品は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の三者が、普遍の人間性と宗教的寛容の精神に立ち、信仰上の違いを超えて偏見と憎悪を克服し、相互の融和へと至ることの大切さを説くのであるが、キリスト教の正当派を自認する、政治的支配権力と結びついた聖職者たちの非寛容的な宗教批判が勢いを増す18世紀に、このような作品が生まれたことは注目に値する。カントの「啓蒙とは、自らその責めを負うべき未成年性から人間が脱却することである。未成年性とは、他人の指導なしには自己の悟性を使用できない状態である。…自己の悟性を使う勇気をもて!というのが啓蒙の標語である」という言葉にもあるように、レッシングにとっては、宗教的権威に対しても、政治的支配権力に対しても、それらが有する抑圧・欺瞞・排他性に対しては、勇気を以て批判することが彼の人間愛の原点であった。人間の価値は、その人間が所有している、あるいは所有していると思込んでいる真理にあるのではなく、真理究明に費やした誠実な努力にあるのであって、所有は人間を無為怠惰にし、傲慢にする、というのが彼の一貫した精神的態度である。彼は『賢者ナータン』において、当時の宗派宗教のもつ形骸化した独善性を批判すると共に、真の宗教とは何かを、理性と信仰の本質に立って模索する。正統派にとっては、造物主としての神は被造物としての世界を超越した存在であるが、レッシングにとっては、スピノザのいうように、「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」。神と世界との対立から離れ、神と自然との同一性に立ち、隣人愛の実践を通して神に服従するところに彼は信仰の本質を見るのである。

〈吉田〉レッシングには、ラムラーとともに編纂した『ローガウ寓意詩集』という、ささやかな仕事がある。ドイツの過去、つまり17世紀の言語資源を訪ねるこの作業から、近世の口頭的言語が18世紀以降の近代ドイツ文学言語の確立過程において担った重要な役割を検証することができる。外来語の使用における中庸的態度を維持し、ドイツ古来の口承言語——そこでは方言も中核的要素となる——を保存するローガウ詩をもとに、18世紀半ばのレッシングは、フランス寄りに傾いてきたこの数十年のドイツが再び立ち戻るべき出発点を、ローガウの17世紀シュレーゲンに定め置くのである。

口承言語には、ことわざという要素がある。ローガウの寓意詩はそれを豊富に取り入れているが、様式化されたこの口承的表現は、レッシングの戯曲作品にもまた満ち溢れている。その意味で『ローガウ寓意詩集』の編集刊行とは、自身の戯曲創作のための踏み台でもあった。とりわけ集大成的な戯曲作品である『賢者ナータン』は、修辞学的・論争的言語表現を顕著な特徴とする。そ

れはまさしく口頭の言語実践が活かされたものであるが、それだけでなく、この作品の構造的な核心をなす登場人物の「本当の名前」の発見への道は、口承言語の世界と文字言語の世界の相互の協働によって強く縁取られている。記憶術として、心身一体的な営みとして存在する口承言語と、時間と個人を越えた記録・保存に力を発揮する文字言語——双方は明確に区別されているのと同時に、またどちらが欠けても、この発見の過程は成就しない。

近世ドイツ語の展開の発端に立つルターは、口承言語と文字言語を意識的に使い分けていた。このことは、同じくドイツ・プロテスタントの系譜に立つレッシングの自覚的な言語使用、すなわち彼が「戯曲のなかに、言語的にきわめて有効な形で実現されたところの、文字コミュニケーションの形態と口頭コミュニケーションの形態の機能的差異化」(レルヒナー)を行ったことを思い起こさせる。はたしてレッシングは、ルターに始まりローガウへと続く近世の口承言語を巧みに織りこんで蘇らせたのであり、そしてレッシングの言語研究を受容したヘルダーが、後に古き民謡という口承世界をさらに独自に開拓してゆくことになる。つまりここには、ドイツの口承言語の流れが見えるのである。

このヘルダーが追求する民謡的口承性は、クラウドイウス、ブレンターノなどの詩に見られるような、いわば神秘主義的瞑想性と音楽性をもつ独語的な語りへと向かってゆく。その要素は、たしかにルターにも、つまり『キリスト者の自由』の著者であり讚美歌作者であったルターにも存在したものだだろう。しかしレッシングがルターから受け取った口承言語性は、それとは別のものであった。それは言葉の受け取り手との相互性、対話性の上に成立する、明晰さと知恵を柱とした格言的口承性である。つまりルターから流れ出した言葉は、近代初頭の時点で、この二つの支流に分かれていくのである。「ヘルダーは、話すがままに書く。レッシングは、あたかも話しているかのように書く。」(マルクヴァルト)その論争的散文や批評文には、口承言語的な明解さと力強さが、文字言語の様式性、組織性とのあいだに不即不離の関係を築いている。このレッシングの明晰にもとづく口承性を、後世のドイツの誰が受け継いでいったのか、あるいは誰もそれを受け継ぐことができなかったのか、それはまた別の問題として残っている。

〈芦津〉啓蒙主義者として、またドイツ近代文学・演劇の祖として、本国ドイツにおいて高く仰ぎみられたゴットホルト・エーフライム・レッシング。彼の作品が、海をわたって英国にやってきた時、どのように受容されたのか。また、その受容のあり方は、彼の戯曲について

何を語っているのか。悲劇『エミーリア・ガロッティ』(Emilia Galotti; 1772)(以下『エミーリア』と略)の英国初演時の状況を、多くの劇評類や批評記事、および18世紀末の英国の政治的・文化的背景を手がかりに考察し、同悲劇の受容の実像に迫るとともに、そこに浮き彫りにされる同戯曲の問題点を明らかにした。以下には研究の概要を記すに留めるが、詳細は『真宗総合研究所研究紀要第23号』掲載の「英国における『エミーリア・ガロッティ』の受容について—その英国初演をめぐる—」を参照されたい。

(1)悲劇『エミーリア』の政治性について

『エミーリア』が英国初演を迎えた1794年、英国は革命後のフランスとの戦闘の最中にあり、英国国民は敵国フランスへの激しい憎しみと愛国主義的感情を募らせていた。イタリアに場面設定されたドイツ悲劇『エミーリア』は、英国やフランスとは本質的にはならん関係がないにもかかわらず、その英国初演においては当時の国民の最大の関心事、すなわち英仏の政治的状況と密接に連想づけられて上演・受容された。その結果、通常はドイツ政治体制の批判と解釈される同悲劇の政治諷刺性は、むしろ敵国フランスの批判へと転用されると同時に、英国国民の愛国心鼓舞、英国国家と国王ジョージ三世の賞賛という、英国の当時の政治的要請にかなう目的にもたくみに供されたのであった。

(2)悲劇『エミーリア』の道徳性と歴史性について

18世紀後半の英国観客の特色は、過剰なまでの道徳的潔癖さにあるといわれる。したがって、「詩的正義」の原則に反する『エミーリア』のプロットや、自らの肉欲を認めるヒロインが、当時の英国観客を満足させるものでなかったことにも容易に合点がゆく。しかしながら、『エミーリア』が英国初演時に不評を被ったまた別の理由として、同戯曲のはらむ曖昧な歴史性が挙げられよう。『エミーリア』執筆においてレッシングは、古代ローマの英雄譚ヴァージニア物語の「近代化」を目論んだ。しかしながら、英国初演時の劇評や批評から窺えるのは、元来は人気のあったヴァージニア物語が、古代の文脈から現代へと置き換えられたとたんに、18世紀当時の倫理観にさらされて、英国人にはにわかには受け入れがたいものとなってしまった点である。ヴァージニア物語が内包する古代ローマ的「美德」は、どうしてもキリスト教的倫理観とは相容れなかったということである。このように、英国『エミーリア』初演の受容のあり方は、古代と現代の整合に失敗した戯曲『エミーリア』の曖昧な歴史性を如実に映し出すものともなっている。

共同研究

平安時代古記録の研究

研究代表者・教授 佐々木令信
(日本仏教史学)

本研究は、大谷大学に所蔵されている平安貴族藤原資房の日記『春記』を中心に、平安時代の貴族の日記（古記録）を通じて、当該期の政治・宗教・文化・社会全般について、検証・解明することを目的として行ってきた。

当該期の時代の歴史の解明において、貴族の日記は、古文書と並んで一級史料として重要視されてきた。なかでも、本学所蔵の長久2年〔1041〕も含め、藤原資房の『春記』の記録された時代は、藤原頼通政権時代に相当する。前代の藤原道長の時代は、道長の日記『御堂関白記』や資房の養祖父実資の日記『小右記』などの日記が現存する一方で、頼通時代を知る日記は『春記』のみといっていよい。頼通の時代は、社会経済史では長久の荘園整理令、仏教史の分野では仏師定朝作の阿弥陀如来像を本尊とする平等院建立、法成寺伽藍の整備など、特筆すべき時代といえる。しかしながら、その重要な時代を記録した『春記』について、本学所蔵の古写本の歴史的意義も含めて、古記録全体の中での位置づけなどの基礎的研究についても十分行われてきたとはいいがたいのが現状である。このような現状から、従来の研究成果の整理・検討作業とともに、書誌的・歴史的位置付けの研究が不可欠と考えたのである。

研究活動の具体的内容について、以下述べておきたい。

本研究では、まず本学所蔵『春記』長久2年2月条本文と紙背文書について検証する作業を進めた。そこでは、研究員と協同研究員との研究により、本文と紙背の筆致が異なること、日記本文が先に書写された後、紙背文書が書写された事実を確認したのである。かかる成果を踏まえて、『春記』の書誌的課題に取り組んだ。その結果、この日記の伝存状況を精査する中で、一つの写本から系統的に分かれて写本が伝存しているのではないこと、したがって現存の写本は、別々の系統における書写本と位置づけられること、本学所蔵『春記』も含めて、多数の写本の紙背が、寺院で書写された聖教類であることなど

の点が、書誌的に明らかとなったのである。

本研究が、本文内容についても検証した大きな成果として、次の点があげられよう。まずは、『春記』18日・19日条の記事から、儀式書『北山抄』や『和漢朗詠集』の編著者として著名な藤原公任について、岩倉長谷に隠遁した後における公任の死亡時の状況をめぐって、長男定頼の証言を収録していること。また、2月全般の記事からは、養祖父藤原実資、実資の娘婿藤原兼頼、父資平、そして資房などの小野宮流藤原氏一門相互の関係などを解明した点であろう。さらに加えて、記主藤原資房が当該期に蔵人頭在職中であり、2月全般を通じての職務記録からは、藤原頼通政権期の蔵人頭の活動実態が明らかとなったのである。この記事内容からは、従来不明な点が多い藤原頼通政権期における天皇・摂政関白・蔵人頭による国政運営のシステム内容の解明などの重要な研究成果が得られたのである。

他方、本学所蔵『春記』と同様、東寺に架蔵され類本とされる京都国立博物館所蔵『春記』〔3巻〕についても検討を加えた。同館所蔵本の内、本文記事は、長暦4年〔1040〕8月条、永承7年〔1052〕4月～8月条に相当する。同館所蔵本3巻の各本文は、類本とされる本学所蔵『春記』といずれも書写の筆致は異なること、また同館所蔵3巻それぞれの本文も筆致は異なることなどが成果としてあげられよう。3巻の内1巻目の紙背には「秘密十地研鏡抄」が、3巻目には永万2年〔1166〕の書写奥書をもつ「四種大乘浅深記」という聖教類が書写されている。中でも注目されるのが、2巻目醍醐寺座主勝賢の書写奥書をもつ「如法尊勝法関係文書」である。この「如法尊勝法関係文書」は、全部で20点あり、天仁2年〔1109〕曼荼羅寺範俊・康治2年〔1143〕／久安3年〔1147〕勸修寺寛信が行った如法尊勝法についての記録について、醍醐寺勝賢を中心とするグループが書写したものである。この書写した背景については、いずれの修法を担当した東密僧も小野流の系統に帰属していることを考慮するならば、同じく小野流に属する勝賢が、元暦年間〔1184～85〕に如法尊勝法を行うにあたり、修法の先例故実を集積しておく必要性があったのではないかとの知見を得たのである。この紙背文書をめぐる共同研究の大きな成果として、20点の内、3点の文書が、東密の修法内容を集大成した『覚禪抄』と同一の内容をもつものであること、他の文書についてもその大半が、『覚禪抄』と深い関連をもつものであるということを知り、貴族の日記〔古記録〕本文と紙背文書の内容を検

証することが重要であるという認識を得た点をあげることができよう。

以上、平安時代古記録の研究をめぐる共同研究の結果、本学所蔵『春記』紙背文書の分析、寺院の聖教類の料紙として平安貴族の日記が用いられる理由や背景などが主要な課題として残された。しかし、幸いにも本研究は、一般研究〔共同研究〕として活動の継続が許可されたので、引き続き所期の課題について取り組みたいと考えている。

個人研究

「悲劇論」との関連における ヘーゲルの「反省論」の研究

研究代表者・教授 門脇 健
(宗教学)

本研究では、ドイツの哲学者G.W.Fヘーゲル(1770-1831)の主著 *Wissenschaft der Logik* (『大論理学』)の第2巻「本質論」の中の「反省論」の意義を明らかにすることを直接の目的とし、筆者がこれまで研究してきた *Phänomenologie des Geistes* (『精神現象学』)を中心としたヘーゲルの「悲劇論」(ヘーゲルの独自の『ハムレット』理解)における和解の構造と対比させるという研究方法を採用することによって、この反省の論理が、「現実との和解」というヘーゲルの根本命題の核心を形成していることを明確にすることを最終目標とした。

2004年度においては、Hegel-Studien Beiheftを始めとする先行研究の収集・調査、Jacques Lacanの現在出版されている *Le séminaire* などの参考文献の収集・調査に費用と時間が当てられた。

そこで明らかになってきたことは、ヘーゲル研究における、「ヘーゲルの『ハムレット』理解に関する研究の欠如」という事態である。

確かに、19世紀にはヘーゲルの弟子たちによって、「ヘーゲル的」ハムレット論が展開されたが、しかし、それはヘーゲルの叙述に散見される『ハムレット』の痕跡を克明にたどるというものではなく、ヘーゲル哲学の完成されたカテゴリーによって『ハムレット』を分析するものであった(例えば悟性的な哲学者としてハムレットを位置付ける)。そのような哲学的な一般化を施されたハムレット像が、実存主義的観点から批判されたのは

当然であった。その後その実存主義的批判に答える論文が1949年にE.ヴォルフによって書かれているが、それもヘーゲルの『美学講義』のハムレット像を再構成するだけで、ヘーゲルの思想形成の核心におけるハムレット像に迫るものではない。つまり、精神現象学に散らばるハムレットへのヘーゲルの言及は無視されてしまっているのである。

また、ヘーゲルの『歴史哲学講義』のエドワード・ガンスによる1837年刊行の第1版でも、ハムレットの父親の亡霊(これも Geist というドイツ語が当てられている。)と世界史を導く Geist = 精神の関係が論じられている。ところが、カール・ヘーゲルが再編集した1840年の第2版においてはこの箇所は消えている。そして、ホフマイスターによって新たに編集された講義録、そして現在陸続と刊行されている弟子たちのノートに基づく講義録にもその箇所は、現時点では発見できていない。まるで、ヘーゲルが『ハムレット』に深い共感を覚えたことは、ヘーゲルの汚点になるような扱い方なのである。

この「欠如」「無視」にはいったいいかなる力が働いているのであろうか——この問題が、ヘーゲルの「和解論」「反省論」を解く上で大きな問題となって浮上してきた。というのは、アンティゴネーについては集中的に論ずるがハムレットは間歇的にしか言及しないヘーゲル自身にこの「欠如」「無視」の責任があるからである。この問題は、フロイト・ラカンの「トラウマ論」との関係で考察することで、ヘーゲル研究の新たな局面を切り開くことになるであろう。

また、精神(ガイスト)・悲劇・反省論を解く上で、ヘーゲルが目する悲劇の主人公、つまり『精神現象学』において直接に名指される悲劇の主人公、つまりハムレットとアンティゴネーの両者ともが、「死者の弔い」をめぐる悲劇の主人公であることにも注目する必要が明らかになった。なぜならば、ヘーゲルにおいて反省は歴史とつねに関連するが、ヘーゲルは、その歴史を『精神現象学』の最後で「頭蓋骨の場所＝ゴルゴダの丘」で眺める、という言い方をしているからである。アンティゴネーは、国家の法によって禁じられた兄の葬礼を、家族の法に従って実行する。それは直接的な安定したギリシャ的ガイスト(人倫)を解体する行為でもあった。ハムレットは父の亡霊＝ガイストの復讐の命令に躊躇しながら結果として、復讐を成し遂げる。それは同時に「和解」の成就でもあった。ヘーゲルは、そこに絶対精神＝ガイストが成立すると言う。つまり、亡霊＝ガイストが精神＝ガイストとなる。

ヘーゲルは、歴史をガイストのギャラリーを巡ること

だと言う。そのとき、過去に生きた者たち、つまり死者たちを、亡霊ではなくガイスト＝精神として叙述することを可能にしているのはいったい何か。そこには忘却(反復・抑圧)と回想(反省・転移)という問題がある。この問題も、「無意識」「反復」「抑圧」「無意識」などの精神分析の知見をかりて解明すべき問題であろう。

なお、ここに述べられた「死者の弔い」を巡る問題は、親鸞の自我の問題との関連させて、2005年5月にマールブルク・フィリップ大学で開催された第5回「ルドルフ・オットー・シンポジオン」において、Gewalt und ihre Überwindung im Lichte des Shin Buddhismusとしてドイツ語で発表された(ドイツのEB-Verlagから論文集として発表される予定)。

個人研究

『列仙全傳』の研究

研究代表者・教授 佐藤 義寛
(中国文学)

中国における仙人の伝記集は劉向の撰と伝えられる『列仙傳』を嚆矢として、以降陸續と編纂されてきた。その集大成とも言うべきものに元・趙道一の『歷世眞仙體道通鑑』五十三巻・続編五巻・後編六巻がある。ところがこれより遅れること四百年ほどして、明の万曆二十八年(1600年)に汪雲鵬なる書肆の手によって、さらに『列仙全傳』という書物が刊行される。この『列仙全傳』は正確にはそのタイトルの頭に「繪圖」の二字を冠して呼ばれるのが普通であり、この「繪圖」の二文字にこそ、書肆・汪雲鵬の出版意図があり、また『列仙全傳』という書物の価値が存するのである。そのせいもあって、この『列仙全傳』の絵像は現代でも非常に利用頻度の高い資料である。しかし『列仙全傳』の伝記それ自体は、これまで日本はもとより中国においても、まったく等閑視されてきており、ほとんど研究の手が加えられてこなかった。

書籍研究の常道として、筆者はまずその版本及び書誌学的研究を行い、その研究結果は大谷大学文藝學會刊行の『文藝論叢』59・60号に『列仙全傳』の研究(一)、(二)として発表しており、ある程度の成果は成し遂げたと考える。ついで『列仙全傳』に収載されている絵像の

特質と後世の諸本に与えた影響について、図像学的見地からの研究を行い、『文藝論叢』62号においてその一端を発表した(『列仙全傳』研究(三)―図像学的見地から―)。

次には、この『列仙全傳』に立伝されている個々の仙人の伝記本文についての研究を行うべきである。それは言い方を代えるなら『列仙全傳』に至るまでに、その伝記内容がいかに推移・変質してきたかを辿るということでもある。そこでそうした変容の足跡を探る上で第一にすべきことは、各仙人伝について、先行する伝記資料にはいかなるものが存在するかを明らかにすることである。

ひとくちに伝記資料と言っても、『列仙傳』に代表されるような所謂「仙傳集」や『三洞珠囊』のごとき道教に関する類書の書物、あるいは各地の道観志や道山志の類、さらには唐宋以後盛んになる仙人を主人公とする小説類まで実に幅が広い。こうした各種の書籍を博搜して、『列仙全傳』に立伝されている諸仙人に関する伝記資料の索引を作成することが本文研究に先立ってぜひとも成し遂げなければならない基礎作業である。また同時に将来『列仙全傳』に立伝されている以外の仙人に関する同様な索引を作成するためにも、いわば中国におけるより広範な仙人像の把握のためにも裨益するところが大であろうと思われる。そこで筆者は2004年度真総研一般研究(個人研究)において、この『列仙全傳』に関する研究をもって応募し、研究を遂行したものである。

そこでまず第一に、仙伝集の基本であるいくつかの書物(具体的には、『列仙傳』『神仙傳』『仙苑編珠』『三洞珠囊』『三洞群仙錄』『歷世眞仙體道通鑑』『太平廣記』『古今圖書集成』)及び、書誌学的研究により明らかになった『列仙全傳』と何らかの系統関係にある書物(具体的には『列仙全傳』の原拠である『廣列仙傳』、『列仙全傳』の抜書き集とも言うべき『消搖墟經』、さらにその模本とも言うべき『三才圖會』中の人物篇仙伝類等々)を選び出し、『列仙全傳』に立伝されている仙人の伝記資料の存在の有無を明確にし、その巻数とともに別名・別号などもあわせて調査した。その調査成果は『文藝論叢』63号に『列仙全傳』研究(四)―伝記資料所在索引【第一部】と題して発表済みである。引き続き、第一部で取り上げた以外の様々な道観類を含めた仙伝類を対象とした伝記資料所在索引を作成し、同じく『文藝論叢』64号に『列仙全傳』研究(五)―伝記資料所在索引【第二部】として発表した。最後に、その増補改訂版をも作成し、近い将来研究成果の最終報告として発表する予定である。

公開講演会要旨

チベット文学史における「古代・近代・現代」の時代区分について

西藏大学文學院講師 ケツン (克鈞)

1 チベット文学史概観

1.1 口承文学

チベット文学の勃興は、大昔のことであると多くの学者が認めている。初代王ニヤティ・ツェンポ (gNya' khri btsan po) の時代に、ジャンルを増やし、完全なものとなった。『ニヤンレー仏教史 (Nyang ral chos 'byung)』に、「チベットの初代王はニヤティ・ツェンポであって、釈迦牟尼が涅槃に入って千年ほどの時に現れた。その王の時代に、伝承 (gtam rgyud) と物語 (sgrung rgyud) と声律 (sdeb sbyor) と命令 (bka'i kugs) と舞楽 (bro gar) と歌 (glu gzhas) と舞踏 (shon rtsed) と遊芸 (rtsed'jo) などが広まった」とある。

それらは口承文学であった。なぜならその時期、チベットにはまだ文字を書く習慣がなかったからである。当時の口承文学には様々な種類があった。すなわち、物語とグル (mgur glu、宗教歌) と伝承と占い (mo tshig) と教戒 (bslab bya) などである。それらのうち物語は、他のジャンルに比べ流行していたと考えられる。また、敦煌出土の文献から、グル・伝承・教戒というジャンルが、当時未分化であったと考えられる。多くの歴史文献に「チベットの初代王ニヤティ・ツェンポから第27代王ティク・ジェツェン (Khri thog rje btsan) までの27代の間、政治は物語となぞなぞ (Ide'u) によって行われていた」とある。当時、物語などの文学芸術が人々の心を開く術となっていたということが、ここからわかる。知識欲がおおいに膨らんだ当時のチベット人たちは、社会と自然環境を自分たちの心の働きと合致した捉え方により理解しようとしていた。

1.2 書面文学

現在我々が使っているチベット文字がソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po, 581~649) 王の時代に始まったということは、多くの学者の認めるところである。この王の時代から、それまでの王の時代に作られた物語とグル、伝承と占い、教戒などのうち、当時の需要に見合ったものは文字に表された。その後、伝記 (rtogs brjod)

と格言 (legs bshad) などの新たな文学も勃興した。こうしてチベット文学は、心と言葉が合致した完全な芸術となりはじめた。特にティソン・デツェン (Khri srong lde btsan, 742~797) 王の時代から、インド仏教文化に関するものがあらゆる方面で翻訳・確定されるようになった。13世紀前後になると、サキヤ・パンディタ (Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182~1251) が仏教史ばかりか、[インド伝来の] その他の学問、すなわち、因明・医方明・工巧明・声明についても、特に詳しい研究をおこなった。大翻訳者ショントン・ドジェ・ギェンツェン (Shong ston rDo rje rgyal mtshan, 13c.) は、『詩鏡 (sNyan ngag me long, Kavyadarsa, Pek. 5789)』をチベット語に翻訳した。以降、チベットの文化はあらゆる方面で発展した。後のチベットの多くの学者が、著作に大いに努力し、数多くの作品が残され、今我々はそれらを目にすることができる。

2 チベット文学史研究

以上のように、チベット文学は非常に早い時期に起こり、尽きる事のない様々な喜びと悲しみの感覚を人々に与えてきた。しかし、その歴史についての研究となると、開始されてまだ日の浅いものである。その嚆矢となるものは、1985年に出版された『藏族文学史』である。これを含め、以降、以下の6つの研究成果が世に問われている。

- A 中央民族学院藏族文学史編写組 (編著) 『藏族文学史』四川民族出版社、1985年 (中国語)。
- B 王沂暖・唐景福 『藏族文学史略』青海民族出版社、1988年 (中国語、未見)。
- C dPa rtse & lHa rgyal tshe ring, *Bod kyi rtsom rig byung 'phel gyi lo rgyus dang khyad chos*, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1999.
- D Kun dga' *Bod kyi rtsom rig gzhung lugs skor gyi mam bshad*, Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1999.
- E rGya ye bKra bho(ed.), *Bod kyi rtsom rig lo rgyus skal bzang mig sgron*, 2 vols., mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 2002.

F IHag pa chos 'phel, *Bod kyi rtsom rig lo rgyus mun sel sgron me*, Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2003.

3 チベット文学史の時代区分について

先述のとおりチベット文学史は、まだ新しい研究ジャンルである。それゆえに文学史の時代区分の問題について、意見の一致をみていないが、おおまかに2つのグループに分けることができる。すなわち「4つに時代を区分する説」を採用するグループと、「3つに時代を区分する説」を採用するグループである。

3.1 4つに時代を区分する説

AとEは、チベット文学史を4つの時代に区分する点一致している。しかし、それぞれ時代の呼称については一致していない。またどの年代で時代を区分するかについても若干の相違がある。

A 『藏族文学史』の時代区分

i. 原始社会と奴隷制社会の文学：～842

- (a) 神話 (Iha sgrung)、(b) 伝承、(c) 詩 (snyan ngag)、(d) 歴史文学 (lo rgyus dang 'brel ba'i rtsom rig)、(e) 物語、(f) バシエー (sba bzhed)、(g) 翻訳 (yig sgyur)

ii. チベット分裂時代の文学：843～1264

- (a) 英雄叙事詩『ケサル王物語 (Ge sar rgyal po'i sgrung)』、(b)『尊者ミラレパの伝記と宗教歌 (Mi la'i rnam mgur)』、(c)『サキヤ格言 (Sa skya legs bshad)』、(d) 埋蔵文献 (gter ma)、(e) 物語、(f) 仏教文学の翻訳

iii. 封建農奴制社会前期の文学：1265～1644

- (a) 歴史文学、(b) 伝記文学、(c) 詩、(d) アチェ・ラモ (チベット歌舞劇)、(e) 物語、(f)『詩鏡』の翻訳とその影響

iv. 封建農奴制社会後期の文学：1645～1949

- (a) 史伝文学、(b) 詩、(c) 長編小説、(d) 風刺文学、(e) 民謡、(f) 長編詩、(g) 諺、(h) 民話、(i) 蔵漢文学交流

E *Bod kyi rtsom rig lo rgyus skal bzang mig sgron* の時代区分

i. 原始と王国時代 (sPu rgyal btsan po'i dus skabs) の文学：～842

- (a) 神話、(b) 口頭伝承、(c) グル及び古い書、(d) 伝記及び石碑文、(e) 説話、(f) バシエー、(g) 翻訳

ii. チベット分裂時代の文学：843～1252

- (a)『ケサル王物語』、(b) ミラレパのグル、(c)『サキヤ格言』、(d) 埋蔵文献、(e) 説話、(f) カンギェル・テンギェルに現れた文学

iii. サキヤ、パクモドウ、リンブン、ツァンパ時代の文学：1253～1641

- (a)『ミラレパ伝』、(b)『詩鏡』、(c) ツォンカパの詩、(d)『ラーマナのアヴァダーナ (Ra ma na'i rtogs brjod)』、(e)『ガンデン格言 (dGe ldan legs bshad)』、(f) 演劇、(g) 伝承

iv. ガンデン・ポタン時代の文学：1642～1949

- (a) 詩、(b) 格言、(c) 教戒、(d) 伝記、(e) 長編物語 (sgrung ring)、(f) 教訓物語 (rab rtog gi sgrung)

3.2 3つに時代を区分する説

C Dおよび F は、チベット文学史を3つの時代に区分する点一致している。しかし、それぞれ時代の呼称については一致していない。またどの年代で時代を区分するかについても若干の相違がある。

C *Bod kyi rtsom rig byung 'phel gyi lo rgyus dang khyad chos* の時代区分

i. 古代 (gna' rabs) の文学：原始～サキヤ派

- (a) 原初の詩、(b) 古代の伝承、(c) 唐蕃会盟碑碑文 (dBon zhang mol ba'i rdo ring gi yi ge)、(d) バシエー、(e) 翻訳

ii. 前期 (snga dar) の文学：サキヤ派～5世ダライ・ラマ (rGyal dbang lnga pa Ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617～1682)

- (a)『アティシャ礼賛三十頌 (Jo bo rje'i bstod pa sum cu pa)』、(b)『サキヤ格言』、(c)『ミラレパ伝および道歌』、(d)『ラーマナのアヴァダーナ』、(e)『常諦菩薩のアヴァダーナ (Byang chub sems dpa' rtag tu ngu'i rtogs brjod)』、(f)『ガンデン格言』、(g)『ケサル王物語』

iii. 後期 (phyi dar) の文学：5世ダライ・ラマ～ゲンドゥン・チョンペー (dGe 'dun chos 'phel, 1903～1951)

- (a)『6世ダライ・ラマの詩』、(b)『シヨヌ・ダメー (gZhon nu zla med gyi gtam rgyud)』、(c)『水樹格言 (Chu shing gi bstan bcos)』、(d)『蓮花園の演劇 (gTam padma tshal gyi zlos gar)』、(e)『国王修身論 (rGyal po lugs kyi bstan bcos)』、(f)『青頸鳥のアヴァダーナ (Bya

mgrin sngon zla ba'i rtogs brjod)』、(g)『鳥と猿の物語 (*Bya spræl gtam rgyud*)』、(h)『ラサ追憶の歌 (*lHa sa dran glu*)』、(i)『尊者ラマに対する礼賛・信仰の香を 馴らす香の池 (*rje bla ma'i bstod pa dad pa'i dri bsung mthul ba'i spos kyi rdzings bu*)』、(j) ゲンドウン・チョンペーの詩、(k) 演劇

D *Kun dga', Bod kyi rtsom rig gzhung lugs skor gyi mam bshad* の時代区分

i. 古代の文学 (gna' rabs rtsom rig) : 原始~1277年
(a) 前半=原始の文学 (ソントエン・ガムボ王の時期 すなわちトンミ・サンポータによりチベット文字が創始されるまでの時代)、(b) 後半 (文字が創始され、シヨントンにより『詩鏡』が翻訳されるまでの時代) の2つの時代に区分している。

ii. 近代の文学 (nye rabs rtsom rig) 1277年~1951年
ダライ・ラマ5世の詩や『ミラレバ伝および道歌』『ガシ家伝 (*dGa' bzhi pa'i mi rabs kyi byung ba brjod pa zol med gtam gyi rol mo*=ドリリン・パンディタ伝)』『ラサ追憶の歌』など、数多くの作品が著作されたとする。

iii. 現代の文学 (deng rabs rtsom rig) : 1951年~
(a) 新しい文学の方向性、(b) 作家の変化、(c) 内容の変化、(d) 芸術的技法の変化

F *lHag pa chos 'phel, Bod kyi rtsom rig lo rgyus mun sel sgron me* の時代区分 (*この文学史は、上冊すなわち古代の部分しか出版されていない)

i. 古代 (gna' rabs) の文学 : 原始~ランタルマ (Glang dar ma)

(a) 詩、(b) 物語と伝承、(c) 歴史・伝記文学、(d) 『兄弟経 (*Phu nu'i mdo*)』、(e) 翻訳

ii. 近代 (nye rabs) の文学 : ランタルマ~チベット解放

(a) 分裂期の文学 : 1) 『ケサル王物語』、2) 『ミラレバの百万歌』、3) 『サキヤ格言』、4) ドムトンパ (*'Brom ston pa rGyal ba'i 'byung gnas, 1005~1064*) の教説、5) 埋蔵文献、6) 物語

(b) サキヤ派、パクモドゥ派支配期の文学 : 1) 詩、2) 歴史文学、3) 伝記文学、4) アチュ・ラモ、5) 物語、6) 『詩鏡』、7) 翻訳

(c) ガンデン・ポタン支配期の文学 : 1) 伝記文学、2) 詩、3) 小説

iii. 現代 (deng rabs) の文学 : 1951~現在

4 新たな時代区分導入の動き

最近、ラサで教材審査委員会 (Slob gzhi rtsom sgrig lta zhib lhan khang) の学者たちが検討して、チベット文学史の新たな時代区分を提示した。チベット自治区では当面この時代区分が採用されることとなった。すなわち

i 古代の文学 : 原始~ランタルマ

ii 中世の文学 (bar dar gyi rtsom rig) : 分裂時代~サキヤ派、パクモドゥ派支配期

iii 近代の文学 : ガンデン・ポタン創設~チベット解放

iv 現代の文学 : 1951~

である。

(抄訳 : 三宅伸一郎)

学会参加報告

第11回ヨーロッパ日本研究協会大会参加報告

国際仏教研究 研究員 井上 尚実

本年8月31日から9月3日まで、オーストリアのウィーン大学で開催された第11回ヨーロッパ日本研究協会大会の宗教・思想史部会（テーマ：浄土）に、大谷大学主催パネルとして安富信哉（教授／応答者）・井上尚実（研究員）・Ugo Dessi（嘱託研究員）・Elisabetta Porcu（嘱託研究員）・Michael Conway（博士前期課程学生）の5名が参加し、近代真宗についての研究発表を行ない、海外の研究者と学術交流をした。以下にその概略を報告する。

ヨーロッパ日本研究協会（European Association for Japanese Studies）は、ヨーロッパにおいて日本研究（Japanese Studies、日本学 Japanology）に従事する学者を中心に1975年に結成され、翌年のチューリッヒ会議以来3年に1回の大会をヨーロッパ各地で開いている。（1979年フィレンツェ、1982年ハーグ、1985年パリ、1988年ダーラム、1991年ベルリン、1994年コペンハーゲン、1997年ブダペスト、2000年ラティ[フィンランド]、2003年ワルシャワ）。現在、42カ国に約650人の個人会員、35の組織会員を抱える大きな学会で、研究分野も多岐にわたり、言語学、語学教育、文学、宗教、思想史、歴史、政治、国際関係、経済、経済史、社会史、人類学、社会学、環境問題研究、視覚芸術、パフォーマンス芸術などをカバーする。今年のウィーン大会には640名以上の参加があり、8つの部会に分かれて4日間の発表が行われた。

今回、宗教・思想史部会のテーマに「Pure Land 浄土」が選ばれた背景には、ヨーロッパの日本研究者の間に、日本宗教・思想史における浄土教の重要性についての認識が少しずつ浸透してきたことがあるが、直接的には部会責任者をつとめたガレン・アムシュタッツ教授とマーク・ブラム教授の意向が働いている。アムシュタッツ教授は昨年ハーバード大学のライシャワー・センターから龍谷大学に移られたが、その著書 *Interpreting Amida: History and Orientalism in the Study of Pure Land Buddhism* (State University of New York Press, 1997) において、西欧が浄土教に対して不当に無関心であった歴史を見事に分析し、現在それがようやく是正されつつある動向に大きく貢献している。マールブルグ大学のバルト

教授が本学で「世俗化」について講演された際にも、真宗については主としてアムシュタッツ教授の研究を参照されていた。もう一人の部会責任者、ニューヨーク州立大学のブラム教授は、カリフォルニア大学バークレー校での院生時代以来、長尾雅人・梶山雄一の両先生に学ばれた経験を持ち、文献学を基礎としながら、宗教的・思想的に幅広い視野から浄土教研究に従事されており、現在アメリカで最も注目される仏教学者の一人である。本研究所の国際仏教研究班では、この11月末にオックスフォード大学出版から出た蓮如研究の本 *Rennyo and the Roots of Modern Japanese Buddhism* (Oxford University Press, 2005) の編集や、清沢満之の論文英訳 (*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings*, Otani University, 2001) 所収。この近代教学論文集は、ブラム教授による Introduction が付されて SUNY Press から出版予定) などを通じて長年にわたり協力をいただいている。

アムシュタッツ、ブラム両教授から「浄土」をテーマとする今回の大会に大谷大学から参加してみないかという呼びかけをいただき、国際班で検討してパネルを準備した。近代浄土真宗における「浄土」に焦点をしばり、個人発表でなくパネルを組織できたことは、欧米の研究者の間に近代真宗についての関心を惹起する意味で効果があったと思われる。結果的に大谷大学の発表は唯一の組織されたパネルであり、このように一つのセッション全体を大谷パネルに充てるプログラムが可能となったのは、アムシュタッツ、ブラム両教授の好意による。

パネルの構成は、マールブルグ大学の博士課程を終えて当研究所の嘱託研究員を勤めながら博士論文を作成中のウーゴ・デッシ氏、エリザベッタ・ポルク氏、シカゴから来日して本学大学院で近代教学を学び、安田理深についての修士論文を提出したマイケル・コンウェイ氏、そして研究員の井上の計4名が各自の研究に基づいた発表を行ない、安富信哉教授がそれぞれにコメントしてまとめるという形を取った。イタリア出身で英語・ドイツ語に堪能なデッシ氏とポルク氏、英語を母国語とし日本語もかなり上達したコンウェイ氏の参加により、国際学会での発表にふさわしいパネルになった。4月以降、毎

月1回の集まりをもち、そこにはアムシュタッツ教授や安富教授、マイケル・パイ教授も顔を出して下さり、和やかな雰囲気の中で準備が進められた。

英文で提出したパネルテーマと趣旨は次のようなものである。

“Contextualizing the Pure Land Buddhist tradition in modern Japan”

(Otani University Panel)

This panel aims at analyzing various aspects of Pure Land Buddhism in modern Japan, particularly through an investigation of its interaction with social and cultural conditions, focusing on one of its most distinctive Japanese developments, Jōdo Shinshū (Shin Buddhism). Emphasis is placed on the dynamic responses of this religious tradition to the problems of modernization, and on its contribution to the development of Japanese religiosity, society and culture as a whole.

この趣旨に沿って、明治初期から現代まで時代の流れを追って次の4本の論文が準備された。

1. *The modernization of Shinshū in local contexts: The case of Matsumoto* (Takami Inoue)
2. *Seeking the Pure Land in post-war Japan: Yasuda Rijin's search for a Pure Land sangha and the Dōbōkai Undō's quest for a Pure Land* (Michael Conway)
3. *Facets of Pure Land Buddhism in Japanese culture* (Elisabetta Porcu)
4. *Present-day social activities in Jōdo Shinshū* (Ugo Dessi)

最初にパネル全体の導入として、井上が近代浄土真宗の背景となる蓮如以降の本願寺の歴史と、明治初年の廃仏毀釈に対する真宗門徒の抵抗を紹介し、そこに現れた近代化への対応の特徴を考察。次にコンウェイ氏が学術的な面から、同朋会運動の原理となった安田理深のサンガ論について論述。ポルク氏は、これまで見落とされがちであった近代日本文化に対する真宗の貢献について棟方志功や柳宗悦を例に論じ、最後にデッシ氏が現代の真宗、特に大谷派における社会的活動について、非戦平和やハンセン病問題を中心に考察するという形で、それぞれの博士論文や修士論文の研究テーマに関わる内容で構成することになった。発表時間が一人20分と限られていたため、原稿を短くまとめるには苦労があった。

ウィーンには、大会前日に大阪からの直行便で到着し、サルディニアを経由したデッシ氏・ポルク氏と大学近くのホテルで合流した。多少の時差ボケはあったが、会場を確認し、シュニツェルの夕食をとりながら最終ミー

ティングを行なった。

9月31日の大会当日は、午後2時半から全体開会式があり、4時半から各部会に分かれた。宗教・思想史部会の会場はウィーン大学チベット学教室で、高名なシュタインケルナー教授の研究室と同じ棟であった。40名ほどの出席者を前に東京大学の末木文士教授が「浄土教の現世性と来世性」というテーマで基調講演をされ、4日に渡る研究発表が始まった。会期中、欧米の日本宗教・哲学・歴史研究者による「浄土」についての26の論文発表があった。大谷大学パネルは3日目の昼食休憩後ということで聴衆が若干少なかったが、司会のアムシュタッツ教授の配慮によりセッションの時間が30分延長され、各発表者はゆとりをもってペーパーを読むことができた。安富教授からは4つの発表において「同朋」というコンセプトが共通のキーワードになっていることが指摘され、丁寧な補足・コメントがあった。(尚、4本の論文とそれに対する安富教授のコメントは、来年発行される国際真宗学会の学会誌 *The Pure Land* にまとめて掲載予定)。



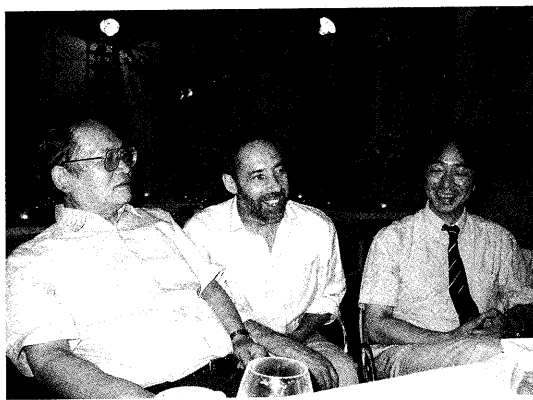
大谷パネルの他にも、南山大学のポール・スワンソン教授による高木顕明の生涯と思想を紹介した発表や、ワルシャワ大学のアグニエスカ・コジラ教授による西田哲学における浄土真宗の影響についての論文など、以下のような真宗に関連して注目される発表があった。

1. *Overcoming of jiriki-tariki dualism: Pure Land elements in philosophy of Nishida Kitarō*, Agnieszka Kozyra (Warsaw University)
2. *Rebirths in the Pure Land: A postmortem fact or a religious experience in this life? The controversial interpretation of Suzuki Daisetsu*, Maximiliane Demmel (University of Munich)
3. *Takagi Kenmyō: A Japanese Shinshū martyr and misfit of the Meiji era*, Paul Swanson (Nanzan University)
4. *Tariki, the adaptive unconscious, and authority*, Galen

Amstutz (Ryukoku University)

5. *Sukhāvati in the context of intermediate existence*, Ineke Van Put (Catholic University of Leuven)
6. *The Antarābhava sūtra and its implications for linking the intermediate existence doctrine with Amitābha's Pure Land*, Mark Blum (State University of New York, Albany)

パネル発表が終わった晩は、アムシュタッツ教授夫妻、ブラム教授夫妻と夕食を共にしながら、今回のパネル発表や今後の浄土教研究について話す機会を持った。アメリカの宗教学界・仏教学界とくらべて、ヨーロッパの日本研究にはまだオリエンタリズムが色濃く残っており、今度の学会でも、中世の寺社参詣マンダラを扱った研究発表などに聴衆の興味が集まり、いまだ近代真宗への関心が芽生える土壌は十分育っていないことなどが話題になった。このような状況を変えていくためにも、継続的な学会参加や、英文による教団史・近代教学アンソロジーの出版は重要な意味をもつことが確認され、国際仏教研究班の今後の活動についても意見を交換することができた。



学会が終わった翌日にはウィーンを発つという忙しい日程であったが、ヨーロッパの学界の現況を知り、研究者と交流をもち、今後の展望を開く上でとても有意義な大会参加であった。

尚、次回2008年の第12回ヨーロッパ日本研究協会大会は、南イタリアのレッチェ (Lecce) 大学で開催される。また、今回の宗教・思想史部会での発表については、*Japanese Journal of Religious Studies* にアムシュタッツ、ブラム両教授をゲスト・エディターとして特集号が企画されている。

第5回国際ルードルフ・オットー・シンポジウム参加報告

国際仏教研究 研究員 藤枝 真

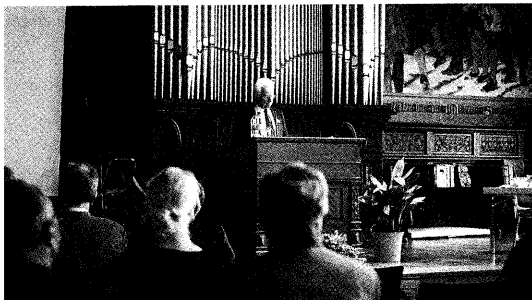
2005年5月5日から8日まで、ドイツのマルブルク大学において、第5回国際ルードルフ・オットー・シンポジウムが「内的平和と暴力の克服——試練に立つ諸宗教の伝統 *Innere Friede und die Überwindung von Gewalt. Religiöse Traditionen auf dem Prüfstand*」というテーマの下に開催された。

当シンポジウムは、マルブルク大学において活躍した神学者・宗教学者ルードルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937) を記念し、マルブルク大学が継続して開催する宗教間対話のシンポジウムである。宗教についての深い理解、宗教間の対話、そしてまた世界平和の希求という願いをもつこのシンポジウムでは、これまで「諸宗教における像の役割」や「イスラムとキリスト教における解釈学上の諸問題」、そして本学との学術交流「浄土真宗と福音主義神学の対話」など、様々なテーマについて数多くの発表・議論がなされてきた。

第5回にあたる今回のシンポジウムでは、福音主義、カトリック、ユダヤ、ヒンドゥー、フェミニズム、チベット仏教、イスラム、上座仏教、チベット仏教、そして真宗という様々な宗教的・思想的伝統を持つ参加者が、「宗教と暴力」の関係について発表を行った。

本学からの参加者は、国際仏教研究班(ドイツ班)キャップの門脇健教授、研究員の木越康助教授、井上尚実講師、吉田孝夫助教授、藤枝真の5人であった。

5月5日、晴天と冷雨がめまぐるしく変わる春の日に、神学部長ディートリヒ・コルシュ教授、そしてルードルフ・オットー記念教授であるハンス-マルティン・バルト教授の挨拶によって大会は開幕した。



マルブルクの丘の中腹、Alte UniversitätのAula(大講堂)に集った発表者・聴衆は、2001年9月11日以降、より注目されるようになった「宗教と暴力」というテーマへの関心を共有し、それについて活発な発表・質疑応答が行われた。

開会翌日に地元紙が本シンポジウムの様子を伝えたが、「宗教と暴力」という大きな見出しのもとに載せられた写真は、会場の様子ではなく、ニュース映像などで頻繁に見かけるイスラム過激派の会見写真であった。多くの耳目を集めるということがマスメディアの仕事の一つであるとはいえ、対話や相互理解の努力を抜きにした事態の単純化は、最もこのシンポジウムが望むところではない。その点からすると、この報道はシンポジウムにとって、皮肉なものとなったと言えよう。

本学からの発表は、門脇健による「暴力と真宗におけるその克服 *Gewalt und ihre Überwindung im Lichte des Shin Buddhismus*」と木越康による「真宗における《悪人の自覚》と救い *Liberation through the Awareness of One's Evil Nature as the Shin Buddhist Path*」であり、5月7日の午前に行われた。

門脇は、ハンセン病患者差別の経緯やカミュの『ペスト』などに触れながら、「私」と「他者」、「私」と「悪」という区別、つまり、実体化された邪悪な存在を私の外に措定することによって世界の出来事を説明しようとする「私」の存在論的構造を指摘する。その上で、阿闍世の物語をこの構造に重ね合わせて解釈し、阿闍世の救いが阿闍世自身の罪の自覚によるものであることを述べる。親鸞においても、罪の自覚は救済の論理の中で重要な役割を果たしている。「いずれの行もおおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という親鸞自身の救い難さへの絶望と告白が、「私」と「悪」という存在論的構造を脱する契機となる。悪は自分の外ではなく自分の内にある。しかしまた、自分自身だけでこの存在論的構造を脱することが困難であるのもまた事実である。そこで、他者を自己の鏡像とし、またその鏡像をことばへともたらし対話することによって、自己自身のあり方を見ることが出来るようになるのではないかと

門脇は述べる。最後に、「私」の存在論的構造の超克と宗教間対話の必要性を重ね合わせる形で発表を締めくくった。

木越は、個人の自由な判断とみなされる行為も全て実は宿業によって起こるものであるという親鸞の見解、すなわち宿業存在としての人間の姿をまず指摘する。そして、シンポジウムの「内的平和」というテーマに関していえば、それは真宗においては「悪人の自覚」であり、「暴力の克服」も、この信仰生活に自然に起こってくるものであると述べる。最後に、実生活・実社会への関与が真宗に求められる今日にあって、様々な形・機会をとらえて「悪人の自覚」をもつことが、個々人による社会への関与として結実するのであると結んだ。

発表に引き続き、発表者二人に加えて司会者のプファント氏、そして言語仲介者としてマイケル・バイ本学客員教授、吉田孝夫本学助教授が壇上に上がり、質疑応答を行った。聴衆の多くにとっては真宗そのものが初めて聴くものであり、真宗の歴史的成立経緯や社会的認知度といった基礎的質問が比較的多かったように思われる。質問が出る度に壇上の5人が円陣を組んで協議しながら丁寧に時間をかけて応答していた姿が印象的であった。



また、井上、藤枝の両研究員は、シンポジウムの合間を利用して、次年度以降のマルブルク大学との学術交流や、コルシュ教授の『マルティン・ルター』の翻訳について、打ち合わせを行った。

その他の発表については、シンポジウムのプログラムを以下に紹介することで、報告に代えたい。

第5回国際ルードルフ・オットー・シンポジウム プログラム

テーマ「内的平和と暴力の克服——試練に立つ諸宗教の伝統 Innere Friede und die Überwindung von Gewalt. Religiöse Traditionen auf dem Prüfstand」

2005年5月5日(休)

16:15~17:30

開会挨拶

神学部長 ディートリヒ・コルシュ教授 (Dekan des Fachbereichs Prof. Dr. Dietrich Korsch)

R.オットー記念教授 ハンス・マルティン・バルト教授 (Rudolf Otto-Beauftragte Prof. Dr. Hans-Martin Barth)

バルトルト・マイヤー (Prof. Dr. Berthold Meyer) (フランクフルト・アム・マイン)

「暴力の克服への諸宗教の貢献に関する平和研究 Die Friedensforschung über den Beitrag der Religionen zur Überwindung von Gewalt」

20:15~21:45

ライナー・ケスラー (Prof. Dr. Rainer Kessler) (マルブルク)

「地は不法に満ちている」(創世記6, 11. 13) 聖書先史時代における典型的な暴力の解消 „Die Erde war voller Gewalt” (Genesis 6,11.13) Paradigmatische Gewaltverarbeitung in der biblischen Urgeschichte」
ヘンリー・G・ブランド (Landesrabbiner Dr. h.c. Henry G. Brandt) (ドルトムント)

「ユダヤ教の視点から見た暴力とその克服 Gewalt und ihre Überwindung in der Sicht des Judentums」

司会：アンゲラ・シュタントハルティンガー (Prof. Dr. Angela Standhartinger) (マルブルク)

5月6日(金)

9:15~10:45

ラム・マル (Prof. Dr. Ram Mall) (コブレンツ)

「ヒンドゥー教、ガンディー、暴力の克服 Hinduismus, Gandhi und die Überwindung der Gewalt」

マルティン・ミットヴェーデ (PD Dr. Martin Mittwede) (フランクフルト)

「内的平和と集中の情動—インド・バクティの伝統におけるシャンティ (寂靜) Innerer Friede und intensive Emotion—Shanti in den Bhakti-Traditionen Indiens」

司会：マルティン・クラーツ (Prof. Dr. Martin Kraatz) (マルブルク)

11:15~12:45

マルゴット・ケスマン (Landesbischöfin Dr. Margot Käßmann) (ハノーファー)

ハインツ・ギュンター・シュトツベ (Prof. Dr. Heinz

Günther Stobbe) (ミュンスター)

「福音主義およびカトリックの視点から見た暴力とその克服 *Gewalt und ihre Überwindung aus evangelischer und katholischer Sicht*」

司会：ハンス-マルティン・バルト (Prof. Dr. Hans-Martin Barth) (マールブルク)

15:15~16:45

ワークショップ I :

フェルナンド・エンス (Dr. Fernando Enns) (ハイデルベルク)

「平和教会の貢献 *Der Beitrag der „Friedenskirchen“*」

司会：ヴォルフガング・ネートヘーフェル (Prof. Dr. Wolfgang Nethöfel) (マールブルク)

15:15~16:45

ワークショップ II :

イーナ・プラエトリウス (Dr. Ina Praetorius) (スイス・クリナウ)

「フェミニスト神学とポスト家父長制的思考：平和への寄与 *Feministische Theologie und postpatriarchalisches Denken :Beiträge zum Frieden*」

司会：エリーザベト・ハルトリーブ (PD Dr. Elisabeth Hartlieb) (マールブルク)

15:15~16:45

ワークショップ III :

ジャヤンドラ・ゾニ (Dr. Jayandra Soni) (マールブルク)

「ヒンドゥー教と暴力の克服 *Hinduismus und Überwindung von Gewalt*」

司会：マルティン・クラーツ (マールブルク)

17:15~18:00

中間報告

ヴォルフラム・ヴァイセ (Prof. Dr. Wolfram Weiße) (ハンブルク)

20:15

公開講演会

マルティン・リーゼブロート (Prof. Dr. Martin Riesebrodt) (シカゴ)

「宗教と暴力—錯綜した関係 *Religion und Gewalt. Eine komplexe Beziehung*」

司会：ハンス-マルティン・バルト (Prof. Dr. Hans-Martin Barth) (マールブルク)

5月7日(土)

9:15~10:45

門脇健 (大谷大学教授)

「暴力と真宗におけるその克服 *Gewalt und ihre Überwindung im Lichte des Shin Buddhismus*」

木越康 (大谷大学助教授)

「真宗における悪人の自覚と救い *Liberation through the Awareness of One's Evil Nature as the Shin Buddhist Path*」

司会：アーデルハイト・ヘルマン-プファント (PD Dr. Adelheid Herrmann-Pfandt) (マールブルク)

11:15~12:45

アーデルハイト・ヘルマン-プファント (PD Dr. Adelheid Herrmann-Pfandt) (マールブルク)

「チベット仏教の視点から見た内的平和と暴力の克服 *Innerer Friede und die Überwindung von Gewalt in der Sicht des tibetischen Buddhismus*」

司会：エックハルト・バンガート (Prof. Dr. Eckhard Bangert, Bhikkhu Pasadika) (バート・アーロルゼン)

14:30~16:00

シャケル・エル-リファイ (Dr. Shaker El-Rifai) (カイロ)

「イスラームにおける戦争の正当化について *Zur Legitimation des Krieges im Islam*」

H.M.アミン・アブドゥラ (Prof. Dr. H.M.Amin Abdullah) (ヨグヤカルタ) 「イスラームにおける暴力の克服のための伝統的な立場と現代の議論 *Klassische Positionen und gegenwärtige Diskussion zur Überwindung von Gewalt im Islam*」

司会：クリストフ・エルザス (Prof. Dr. Christoph Elsas) (マールブルク)

16:15~17:30

ワークショップ IV :

セルヴェット・アルマガン (Prof. Dr. Servet Armagan) (イスタンブール)

「イスラームと暴力の克服 *Islam und die Überwindung von Gewalt*」

司会：クリストフ・エルザス (Prof. Dr. Christoph Elsas) (マールブルク)

16:15~17:30

ワークショップ V :

エックハルト・バンガート (Prof. Dr. Eckhard Bangert, Bhikkhu Pasadika) (バート・アーロルゼン)
「“テラバーダ”の理論と実践における“平和研究” „Friedensforschung“ in Theorie und Praxis im „Theravada“」

20:00

宗教文化博物館見学会

ペーター・J・ブロインライン (PD Dr. Peter J. Bräunlein) (マールブルク)

5月8日(日)

10:00

全教会合同ミサ

ハンス-マルティン・バルト (Prof. Dr. Hans-Martin Barth) (マールブルク)

ゲルハルト・マルセル・マルティン (Prof. Dr. Gerhard Marcel Martin) (マールブルク)

11:00

宗教を超えた平和の集い

(アルテ・ユニヴェルジテート、クロイツガングにて)

11:15

最終報告：ヴォルフラム・ヴァイセ (Prof. Dr. Wolfram Weife) (ハンブルク)

発表者による討論

司会：ハンス-マルティン・バルト (Prof. Dr. Hans-Martin Barth) (マールブルク)

閉会挨拶

ハンス-マルティン・バルト (Prof. Dr. Hans-Martin Barth)

海外調査出張報告

西藏社会科学院との共同研究提携交流と チベット（拉薩）木版印刷の現状

西藏文献研究 研究員 白館 戒雲
研究員 三宅伸一郎
嘱託研究員 井内 真帆
研究補助員 目片 祥子

2005年8月8日から、西藏文献研究班研究員・白館戒雲、三宅伸一郎、研究補助員・目片祥子の3名は、西藏社会科学院との共同研究推進のため、また、伝統的な木版印刷の現状調査を目的としてチベット自治区ラサへと出張した。現地では嘱託研究員・井内真帆も合流し、調査活動をおこなった。以下その報告をおこなう。

8月8日、関空より北京経由で成都へ。成都行きの際は大幅に遅れ、ホテルには翌9日午前1時の到着となった。

10日早朝、成都発 CA4401でラサ・コンカル空港へ。毎年その変化の早さに驚かされるのだが、今回は空港＝ラサ市内間の道でまず驚かされた。これまでチュシュ(Chu shul、曲水)経由100キロの道のり、約1時間半を要していたものが、新設されたトンネルを利用することで、1時間弱に短縮されていた。

今回の第1の目的である西藏社会科学院との共同研究推進については、8月14日午後、院長ツェワン・ギェルメー氏、副所長沈開運氏との会談をおこなった。多忙な院長とは挨拶を交わす程度にとどまり、じっくりと話す事はできなかったが、副院長とは今回初めての面会である。1時間程度、協定実現に向けての話をすることができた。会談に前後して、同院図書館の館長他、所属の研究者と個別に面会、意見交換をおこなった。

ラサでの研究現状についての情報収集の一環として、昨年嘱託研究員として本研究所に滞在されたケツン氏をはじめ、ゲシェー・ツェワン氏、テンパ・ツェリン氏ら西藏大学の関係者と意見交換をおこなった。ケツン氏には特に共同研究として、ゲイエ・ツルティム・センゲ(dGe ye Tshul khriims seng ge)『インド・チベット仏教史(rGya bod kyi chos 'byung rin po che, no. 11847)』テキストの校正を依頼した。

また、私立の研究所で、吐蕃王国時代の偉大な翻訳者の名を冠した「ペーツェー蔵文古籍研究所(dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang)」を訪問、所長

のカルマ・デレー氏と会談した。同研究所は、チベット自治区はもちろん、四川、青海に所蔵されているチベット語文献の整理と保存、研究をおこなっており、昨年『哲蚌寺蔵文古籍目録(‘Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe mnying dkar chag)』(北京：民族出版社、2004年)を公刊した。同目録はその名のとおり、デブン寺(‘Bras spungs)大集会堂階上のネチュ・ラカン(gNas bcu lha khang)、ガンデン・ポタン(dGa' ldan pho brang)内のクンガ・ラワ(Kun dga' ra ba)に所蔵されている文献、およびラムリムパ(Lam rim pa)の旧蔵書に対する目録である。同目録には、これまで我々が目にするができなかった数多くの文献、特にカダム派系の文献の名を見ることができる。これまで本学図書館にしか所蔵されていないとされてきたウパ・ロセー(dBus pa blo gsal, 13c)、『性入法註(rTags kyi 'jugpa'i 'gral pa, no. 13984)』の写本はもちろん、木版本までもがデブン寺に所蔵されていることがわかる(デブン寺に続き、セラ寺(Se ra)所蔵の文献についても目録作成中とのことであった)。稀観本の翻刻や研究もおこなっている。カルマ・デレー氏との会談の中、こうした稀観本に対する研究成果の早期の公刊を強く希望した。なお、ペーツェー研究所については、『哲蚌寺蔵文古籍目録』に対する書評とともに、井内真帆が子細な紹介を発表する予定である。

今回の出張の第2の目的は、ラサにおける木版印刷の現状を調査することである。近年、写本に大きな関心が寄せられる一方で、今に残る伝統的な木版印刷の状況については等閑視されている。現在印刷されているものは、文献学的に無価値なものであろうが、伝統文化の継承という意味で、チベットの今をかいま見ることができる、貴重な情報をもたらすものである。カムのデルゲ(sDe dge)については、大々的な調査が行なわれ、子細な報告も公刊されているが(池田巧『ほか』『活きている文化遺産デルゲバルカン：チベット大蔵経木版印刷所の歴

史と現在』明石書店、2003年)、ラサにおけるそれについては、1959年以前の状況を知らせる多田等観の報告があるだけで(『パルカンについて』『日本西蔵学会々報』5, 1958, pp. 1~3)、その現況について触れているものはない。今回は時間的制約もあり、いわば今後のための予備調査のような形となった。そのため、いくつかの誤りがあると思われるが、とりあえずの記録として、以下にその結果を簡単に報告したい。

1 西蔵仏教協会印経院

メル寺 (rMe ru) 境内内にある。東西2箇所にある工房のうち西の工房では、13世ダライ・ラマの発願により建立された、いわゆる「ラサ版カンギユル」の木版が保管され印刷されている。1985年に、木版がチベット政府の印経院ショー・パルカン (Zhol par khang) から仏教協会に移管されて以降、ここで印刷されるようになったという。カンギユルの価格は8600元。ペレー (dpe ras、経典をつつむ布)、ドンザー (gdong 'dzar、経題箋) を含めると9700元である。また、『八千頌般若経 (brGyad stong pa)』、『普曜経 (mDo sde skal bzang)』、『ダラニ集 (gZungs 'dus)』といった需要の多い経典についてはカンギユルとは別の木版が所蔵されており、これが印刷されている。ちなみに、ショー・パルカンから仏教協会に移管されたのは、カンギユルのみであり、「ブトン全集 (Bu ston gsung 'bum)」をはじめとするいわゆる蔵外文献の木版は檔案館 (yig tshag) が管理しているとのことである。その一部は印刷され、ラモチェ寺 (Ra mo che) 前の売店で販売されている。

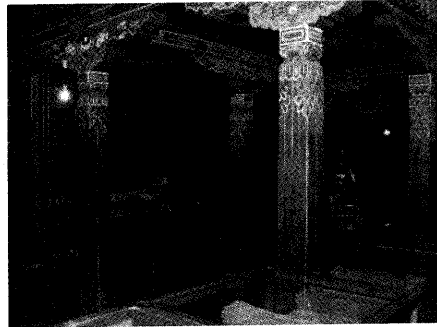
一方、東の工房では、1991年より建立が開始されたテンギユルの木版が保管され印刷されている。

現在カンギユルの印刷に従事しているのは60人、皆、専従であるという。一方テンギユルの印刷に従事する者は専従ではないとのことであった。

2 寺院の木版印刷所

A) セラ寺印経院

1983~84年に創建された。2層からなり、1層の壁際一面に整然と版木が配架保管されており、印刷作業もそこでおこなわれている。現在印経院が建つ場所は、トーポ・カムツェン (sTod po khamts tshan) のあった場所であるという。本印経院所蔵の木版のうち、特筆すべきは「ツォンカパ師弟全集 (rJe yab sras gsung 'bum)」である。これは、もともとショー・パルカンに所蔵されていたもので、1986年に本印経院に移管された。摩耗の激しい版木については新規に彫りなおし、完全なものとした。



セラ寺印経院の内部

その他に以下のものが所蔵・印刷されている。

a. セラ・ジェツンパ (Se ra rje btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, 1469~1544/1546) による教科書 (yig cha)

- *sKabs dang po'i spyi don.*
- *Don bdun cu.*
- *Grub mtha'.*
- *Sa lam le'u dang po.*
- *[Sa lam] Le'u bzhi pa.*
- *mNyan bya'i zur bkod.*
- *dBu ma'i spyi don.*
- *Drang nges rgol ngan tshar gcod.*
- *rje btsun pa'i mam thar.*
- *'Dul ba.*

b. テンダルパ (bsTan dar pa 1493~1568) による教科書

- *Phar phyin mtha' dpyod pad dkar phring ba legs bshad don bsdus.*
- *Sa lam.*
- *Zur bkod.*

c. その他

- *dBu ma 'jug pa.*
- *mNgon rtogs rgyan.*
- *'Grel ba don gsal.*
- *Rigs lam chung ba.*
- *'Bring ba.*
- *Che ba.*
- *Blo rigs.*
- *rTags rigs.*
- *Phyogs 'khor.*
- *Shing rta'i srol 'byed.*
- *Tshad nam blo gsal mgul rgyan.*
- *So thar mdo rgyas.*
- *dBu ma'i lta khrid.*
- *rje'i gsang nam.*
- *sGrol dkar tshe sgrub.*
- *rGyun gsol.*

- *rGyud 'debs.*
- *rDzas tho.*
- *Thun min chos spyod khag gsum.*
- *bsDus sdom rtag sdom thub 'og bskang gso.*
- *Ser smad bla rgyud.*
- *Blo sbyong don bdun rgyud 'debs.*
- *rtsa tshig smon lam bcas.*
- *rje btsun pa'i gsol 'debs.*
- *rNam thar gsol 'debs.*
- *rTa mgrin bla rgyud.*
- *Bya khri'i 'phrin bcob.*
- *bCu gcig bsgoms bzlas.*
- *Byams chen chos rje 'i bstod pa.*
- *Nyam thag dbugs 'byin.*
- *gTor ma brgya rtas.*
- *mTha' bral dbu ma bsnyad pa.*
- *bSam pa lhun grub.*
- *bDe mchog dril bu lha lnga.*
- *sMad blo rtag 'dres ma.*
- *Yang gsang las byang.*
- *Arga'i cho ga.*
- *Bya khra'i gsol mchod.*
- *lHa dgu'i gsol mchod.*
- *brTan bzhugs 'dod sgrub.*
- *Ja khrid.*
- *Ja mchod khag dang mgon po'i mnga 'gsol.*
- *Yo byed byin riabs.*
- *Lam gtso'i zin tho.*
- *dGongs rgyan.*
- *'jigs byed bdag 'jug.*
- *bsDom gsum bslab bya.*
- *Kun rig cho ga.*
- *gSer skyems phyogs bsdu.*
- *rNal 'byor ma'i khrid dang cho ga cha tshang.*
- *Thar mdo.*
- *sMon lam nam brgyad.*
- *rGyal sras lag len.*
- *gNas bcu.*
- *Blo sbyong tshig brgyad.*
- *Dam rdor.*
- *dPa' gcig.*
- *bDe tshe.*
- *Po stod.*
- *Le'u bdun ma.*
- *'Phrang sgröl.*
- *skyabs thugs rje ma.*

- *Pod lnga'i smon lam.*
- *sByin sreg.*

また、以下の22種の護符の木版も所蔵している。

- *gDungs dkar.*
- *rTa mgrin.*
- *Seng gdong ma.*
- *Grib srung.*
- *Sri bzlog.*
- *gZa' srung.*
- *dBang thang srung 'khor.*
- *dGe 'dun nyi bshu.*
- *Mo 'dre'i srung 'khor.*
- *sKag bzlog.*
- *Sad bzlog.*
- *Ser bzlog.*
- *Rims bzlog.*
- *Shes rab 'khor lo.*
- *Zhi ba 'khor lo.*
- *Than bzlog.*
- *rGyas pa'i 'khor lo.*
- *Tshe gzungs.*
- *dByen 'dum.*
- *Srung bzlog.*
- *rTen snying 'khor lo.*
- *Sor 'brang 'khor lo.*

B) デブン寺

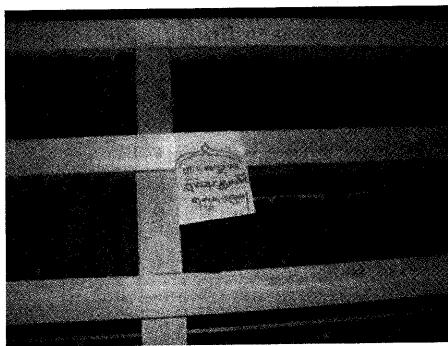
デブン寺には現在、ゴマン (sGo mang)、ロセーリン (Blo gsal gling) の2つの学堂があり、それぞれに印経院が存在し、木版が所蔵されている。また、5世までの歴代ダライ・ラマの宮殿ガンデン・ポタンにも木版が所蔵されている。時間的制約から、今回はガンデン・ポタンおよびロセーリン学堂の印経院のみの調査となった。

i) ガンデン・ポタン

ガンデン・ポタンには、5世ダライ・ラマの全集の木版が所蔵されていたが、完本ではなく、現在は印刷されていない。現在印刷がおこなわれているものは以下のとおり。

- *dMigs brtse ma'i be'u bum, 3vols.*
- *mDzod tig mthar lam gsal byed.*
- *Phar phyin skabs dang po'i mtha 'dpyod mtshan 'grel.*
- *gSang 'dus rigs lnga'i dmar khrid.*
- *sbyor ba'i chos drug.*
- *Zhi ba'i lam thabs.*

- *Blo gsal bgrod pa'i them skas.*
- *Ma gcig khros nag sde lnga.*
- *rDzogs rim dpyid kyi thig le'i zin bris.*
- *bKa 'gdams gsung thor bu.*
- *Lo yi pa'i bde mchog rdzogs rim.*
- *gNyan khrod yig chung.*
- *sGrol ma'i stong mchod.*
- *sGrol ma'i tshe sgrub.*
- *Ma gcig mkha' 'gro snyan rgyud kyi mal 'byor.*
- *bDe mchog gi mngon rtogs.*
- *sGrol ma'i tshe ril gyi cho ga.*
- *'Pho ba'i lhan thabs.*
- *rGan bla ma'i bsdus grwa.*
- *Dul sdoms mthar 'dod yid mun.*



ガンデン・ポタン内に保管されている古い木版

ii) ロセーリン学堂

同学堂で用いられるパンチェン・ソナム・タクパ (Pan chen bSod nams grags pa, 1478~1554) の教科書をはじめとする文献の木版が所蔵・印刷されている。

- *Phar spyi.*
- *mDzod rtsa.*
- *mTha' dpyod.*
- *mDzod.*
- *dBu spyi mtha'.*
- *rGyud bla ma.*
- *rNam 'grel.*
- *'Dul ba dus tshig.*
- *Drang nges.*
- *sDom chen.*
- *sDom chung.*
- *dKa' 'grel.*
- *rTsa tik.*
- *Don bdun bcu.*
- *Sa lam.*
- *Grub mtha'.*

- *Kun gzhi thal phreng.*
- *Chos spyod.*
- *bsDus grwa.*
- *rTags rigs.*
- *Blo rigs.*

ほとんどは、2003年より新規開版されたものであるが、*mDzod rtsa* のみ古いものである。ただし、コロフォンによるとこれは、不思議なことに、ゴマン学堂に所蔵されていたものであった。

C) ガンデン寺

ガンデン寺の印経院は、ツォンカバ (Tsong kha pa, 1357~1419) の遺影塔を祀ったセルドゥンカン (gSer gdung khang) 内にある。セラ寺でも印刷されているセラ・ジェツンパの教科書およびパンチェン・ソナム・タクパの教科書が印刷されている。

a. セラ・ジェツンパの教科書

- *Rol mtsho.*
- *mTha' dpyod.*
- *dBu ma'i spyi don.*
- *Don bdun cu.*
- *Drang nges.*
- *Grub mtha'.*
- *Sa lam.*
- *dGe 'dun nyi shu.*
- *rNam 'grel.*
- *rTen 'brel.*
- *bSam gzugs.*
- *'Gog snyoms.*
- *Yang dag mtha'.*
- *Blo rigs.*
- *rTags rigs.*
- *'Dul sdom.*

b. パンチェン・ソナム・タクパの教科書

- *Phar phyin.*
- *mTha' dpyod.*
- *dBu ma'i spyi mtha' dpyod.*
- *rNam 'grel.*
- *mDzod 'grel.*
- *'Dul ba.*
- *Drang nges.*
- *Don bdun cu.*
- *Grub mtha'.*
- *Phar phyin rtsa tik.*
- *Blo rigs.*

- *rTags rigs.*
- *rGyud bla don Tik.*
- *Kun 'grel.*
- *Dus tshig.*
- *Kun gzhi.*
- *'Dul sdom.*
- *rNam thar.*
- *gSol 'debs.*
- *Rig byed ma.*

c. その他

- *mNgon rgyan.*
- *Jug pa.*
- *rNam rtsa.*
- *mDzod rtsa.*
- *mDo rtsa.*
- *sNgags kyi sa lam.*
- *sPyod 'jug.*
- *Tshad ma.*

うち *Kun 'grel* すなわち、『阿毘達磨集論註』は、42葉からなる。同一テキストがロセーリンでも開版されているが、それも42葉である。両者を比較すると、41b5まで版形が同じであり、開版のコロフォンが異なるのみである。コロフォンによれば、ガンデン寺版は1992年、ロセーリン学堂版はそれより遅い2003年の開版である。ロセーリン学堂版はガンデン寺版を原本とした可能性がある。

異なる寺院・学堂の版本を復刻してでも教科書開版に努力するというこの現象は、実に興味深い。ここで教科書の蔵版は学堂復興のシンボルであり、まさに学堂が学堂たるものとして存在していることを証する機能をもっているように思われるからだ。

D) ヌブ・リクスム・ゴンポ (Nub rigs gsum mgon po)

ラサにはチョカン (Jo khang、大招寺) を中心にして東西南北に、観音・文殊・執金剛の三尊 (リクスム・ゴンポ、rigs gsum mgon po) を祀る堂があり、「四方のリクスム・ゴンポ」と総称されていた。うち、東および北にあった堂は、現在存在しない。残りの西、南のリクスム・ゴンポのうちヌブ (西)・リクスム・ゴンポは、ルブク (Klu 'bug) にあり、現在、ディクン派の管理下にある。そのため、ディクン派関係典籍の木版を多数所蔵している。それらは、13、4年前に開版開始され、ツルティム・イエシエー (Tshul khrims ye shes) 師の校閲を経たものであるという。

E) ロ・リクスム・ゴンポ (lHo rigs gsum mgon po)

ロ (南)・リクスム・ゴンポは、木版を所蔵していないが、ガンデン寺管理下にあるため、同寺印経院のいわばラサ支店のような役割を果たしている。

3 私営のバルバ

ラサには現在、5つの私営のバルバ (par pa、木版印刷業者) が存在する。各バルバはそれぞれ異なった宗派を信仰しており、所蔵する木版も、その信仰する宗派に係わるものが多い。以下、業者名と、その宗派名を記す。

- ベンデン (dPal ldan) …ゲルク派
- ワンドゥー・ニマ (dBang 'dus nyi ma) …ゲルク派
- タシー (Khra sil) …ニンマ派
- ロサン・ツルティム (Blo bzang tshul khrims) …ゲルク派
- ベンジョル・ノルブ (dPal 'byor nor bu) …カギユ派

うち、最後のベンジョル・ノルブは、家庭内の不和がもとで木版が消失したという。わずかに残った木版はカルマ・カギユ派の総本山ツルプ寺 (mTshur phu) に寄贈したとのことである。また、ルブクにいたサムテン (bSam gtan) や、ダワ (Zla ba) というバルバの所蔵していた木版は、彼らの死後、そのほとんどがベンデンのもとに寄贈されたという。

各バルバは、チョカンの巡礼路であるバルコルに、木版本を販売する露店を出している。互いに木版を貸し合ったり、また、タシーがベンデンより、ゲルク派関係の木版本を受領するなどして、不足を補い販売している。

木版本は、用紙の大きさにより2種に分けられる。横幅の長いものはベリン (dpe ring) と、短いものはペトゥン (dpe thung) と呼ばれる。ベンデンでは、ベリンを一枚1角、ペトゥンを一枚5分で販売していた。しかし、近年は紙の高騰により、現在はそれぞれ1.2角、7分で販売している。

印刷工は、専従ではないという。その多くは、おおよそ仕事に習熟したころに、やめてしまう。ゆえに印刷工には若い者が多い。 (文責：三宅伸一郎)

真宗総合研究所彙報 2005. 4. 1 ~ 2005. 9. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇6月9日(木) 16時10分～(博綜館5階第4会議室)
 - 1. 2005(平成17)年度「指定研究」の研究組織について
 - 2. その他
- ◇7月26日(火) 12時10分～(博綜館5階第4会議室)
 - 1. 2005(平成17)年度「指定研究」の研究員(追加)について
 - 2. その他 ①2005(平成17)年度「指定研究」(追加)立上げについて
 - ②東国大学校との共同研究(休止)について
 - ③その他

■指定研究研究会

大学史研究

【研究会】

《作業連絡会議》

- ◇7月13日(木) 16:00～17:50
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
- ◇9月20日(火) 16:30～19:10(同上)
《他研究機関における大学史研究・
大学史史料室に関する研究会》
- ◇5月25日(木) 14:00～16:30
全国大学史資料協議会西日本部会 2005年度総会・
第1回研究会
(立命館大学国際平和ミュージアム)
(参加者:東館紹見<研究員>、加藤基樹<研究補助員>、日野圭悟<研究補助員>)
- ◇7月15日(金)
全国大学史資料協議会西日本部会 第2回研究会
(大阪歴史博物館)
(参加者:加藤基樹<研究補助員>、日野圭悟<研究補助員>)
なお、大学史研究では、『清沢満之全集』未収録文献の翻刻、テキストデータの校正などの事後処理をはじめ、佐々木月樵研究のための資料調査収集、近世学寮年表の作成研究や大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、東本願寺教団現代史の調査研究などを研究課題としてあげ、それらに関する調査・整理作業を日常業務として行った。

国際仏教研究

〈英訳研究班〉

- ①2005年7月25日 14:00～
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
研究会 今年度英訳班の活動方針について
マーク・ブラム先生をお迎えして、今年度の英訳研究班の方針を討議。またブラム先生による、“*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings*”の序文を検討。
- ②2005年8月31日～9月3日(ウィーン大学)
The 11th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS)
国際仏教研究班としてパネルを設け参加した。テーマは“Contextualizing the Pure Land Buddhist Tradition in Modern Japan”。司会:井上尚実研究員、パネリスト:マイケル・コンウェイ(本学大学院修士課程)、ウーゴ・デッシー(本学特別研究員)、エリザベータ・ポルク(本学特別研究員)、コメンテーター:安富信哉(本学教授)。
- ③2005年8月29日～9月3日(ロンドン大学)
14th Conference of the International Association of Buddhist Studies
国際的な仏教学に関する学会としてはもっとも大きいもののひとつである。主にインド・チベット・東南アジアの仏教に関する研究発表が多いが、今学会では中国・韓国・日本の仏教のパネルも設けられていた。特に注目されるのは、Shin Buddhismのパネルで南山大学のポール・スワンソン教授が高木顕明について、国際仏教研究の嘱託研究員でもあるニューヨーク州立大学のマーク・ブラム教授が真宗の歴史意識について、それぞれ発表を行い、おおきな関心を得たことである。この学会にはロバート・F・ローズ研究員が参加し、参加者と交流を深め、情報収集に努めた。
- ④2005年9月9日～11日(武蔵野大学)
国際真宗学会 テーマ「流動する世界と浄土教の可能性 “Potentiality of Pure Land Buddhism in the Changing World”」
国際研として“Shin Buddhist Responses to Modernity”と題するパネルを開催した。司会:井上尚実研究員、パネリスト:マイケル・コンウェイ

(本学大学院修士課程)、ウーゴ・デッシー(本学特別研究員)、エリザベータ・ポルク(本学特別研究員)、コメンテーター：安富信哉(本学教授)。また、木越康研究員が、「日本における近代化と浄土理解の問題」と題する発表を行った。

〈ドイツ班〉

①2005年5月5日～8日(マールブルク大学)

第5回国際ルドルフ・オットー・シンポジウム
テーマ「Innere Friede und die Überwindung von Gewalt. Religiöse Traditionen auf dem Prüstand 内的平和と暴力の克服—試練に立つ諸宗教の伝統」

今回のシンポジウムでは、福音主義、カトリック、ユダヤ、ヒンドゥー、フェミニズム、チベット仏教、イスラーム、上座仏教、チベット仏教、そして真宗という様々な宗教的・思想的伝統を持つ参加者が、宗教と暴力の関係について発表を行った。国際仏教研究班からは、門脇健研究員及び木越康研究員が口頭発表を行った。

- ・門脇健「Gewalt und ihre Überwindung im Lichte des Shin Buddhismus 暴力と真宗におけるその克服」
- ・木越康「Liberation through the Awareness of One's Evil Nature as the Shin Buddhist Path 真宗における《悪人の自覚》と救い」

②2005年6月30日(木) 12:10～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

本年度の研究方向を確認する会議を行った。

I. 「福音主義神学との対話」

2005年3月の国際宗教史学会でのパネルディスカッション「悪の自覚と現代社会——親鸞思想を中心として」および前述のルドルフ・オットー・シンポジウムの成果を公表する。

Dietrich Korsch, *Luther zur Einführung* の翻訳・出版。

II. 「近代化された宗教特に浄土真宗の社会学的観点からの研究」

フランス国立高等学院との「宗教の世俗化」についての共同研究。2006年11月開催のシンポジウムへの予備的研究。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料の目録作成

6月 当該資料を図書館内の一室に移し、目録化のための資料整理カード、分類コード、な

どにつき検討。

7月 中国東北・東部モンゴル地域関連資料から目録作成作業に着手。(継続中)

②中国東北師範大学との共同研究

「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」

9月4～6日 木場・桂華の研究員2名が中国東北師範大学を訪問。学長・副学長を表敬訪問し、共同研究の意義を確認。さらに、共同研究の中国側参加者5名と初会合を開き、具体的研究計画を討議。結果として、

- ・中国側の案内で東部モンゴル地域の現地踏査を実施する。
- ・中国側研究者が日本に在る資料を調査できるよう日本側は協力する。
- ・上記のいずれかの日程に合わせて共同研究会を開催する。
- ・期間終了後、研究参加者はただちに報告論文を大谷大学真宗総合研究所に提出する。

以上4点について完全合意。研究期間は2007年3月まで。

③中国布教および中国仏教研究従事者藤井静宣旧蔵資料の収集

9月18日 木場(研究員)および山本(研究補助員)が資料所蔵先の藤井宣丸氏(豊橋市在住)を訪問し、調査を実施。なお、文献調査は10月18日に実施することで合意した。

西藏文献研究

《出張》

◇8月8～18日 中国チベット自治区ラサ

研究員の白館戒雲、三宅伸一郎、補助員の目片祥子は、西藏社会科学院との共同研究推進のため、また、ラサにおける木版本印刷の現状調査のため出張した。現地では嘱託研究員の井内真帆も合流し、調査活動にあたった。

《研究会》

◇7月21日(真宗総合研究所ミーティングルーム)

「日中のチベット研究の現状について」

中国社会科学院少数民族文学研究所・李連榮(brTson' grus rgya mtsho)氏を迎えて、中国におけるチベット研究、特に、氏の専門であるケサル王物語研究や民間信仰研究についての現状をお聞きするとともに、氏に日本のチベット研究の現状を説明した。

《研究打ち合わせ》

- ◇ 4月13日、5月25日、6月22日、7月20日、8月3日
毎月研究打ち合わせを行ない、進捗状況を確認。



研 究 所 報 第 47 号

2005年10月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435